2017（平成 29）年度文化庁委託事業報告書
「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」

目　　次

まえがき

事業の概要

第１部　宮城県気仙沼市方言の調査報告

調査の概要 ..... 小林　隆　6

語中/k//t/音の有声化..... 大山雄輔　9

アクセント規則 ..... 寺嶋大輔 18

非実現形式「（危なく）シタ」 ..... 津田智史 27

待遇の文末形式「(ラ)イン」 ..... 八巻千穂 37

接尾辞「ラヘン」 ..... 佐藤亜実 48

方言語彙「トゼン類」 ..... 八木澤亮 55

自由会話の特徴—高年層と若年層を対象として— ..... 太田有紀 63

「擬似会話型面接調査」の試み ..... 小林　隆 70

第２部　声で残す方言詩集『生ぎるっちゃ－大震災を乗り越えて－』

..... 櫛引祐希子・方言を語り残そう会 81

ま え が き

本書は、2017（平成 29）年度の文化庁委託事業「被災地における方言の活性化支援事業」のうち、東北大学方言研究センターが担当した「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」の報告書です。

当センターでは、震災発生直後から、被災地の方言をめぐるさまざまな問題に取り組んできました。その活動については、すでに次の６つの報告書に述べています。

『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究』（2011 年度文化庁委託事業報告書）

『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（宮城県）』（2012 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開』（2013 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開　２』（2014 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開　３』（2015 年度文化庁委託事業報告書）

『被災地方言の保存・継承のための方言会話の記録と公開　４』（2016 年度文化庁委託事業報告書）

今年度は、文化庁の事業方針「被災地域の方言の保存・継承の取組や方言の力を活用した復興の取組を支援することにより、被災地域の方言の再興及び地域コミュニティーの再生に寄与する」ことを受け、気仙沼市における日常会話を踏まえた方言の記述と、名取市における市民団体の協力による方言資料の音声化に取り組みました。

今回もまた、現地の方々にはひとかたならぬお世話になりました。特に、話者のみなさまには地元の方言についていろいろと教えていただいたり、方言詩集の朗読に取り組んだりしていただきました。また、気仙沼市における調査では、このたびも気仙沼市教育委員会生涯学習課の手厚いご支援をいただくことができました。名取市における方言詩集の音声化では、「方言を語り残そう会」（代表：金岡律子氏）の全面的なご協力を得るとともに、追手門学院大学の櫛引祐希子先生にすべての面倒を見ていただくことができました。お世話になったみなさま方に心より感謝申し上げます。

私たちのこの取り組みが、震災の困難の中にある“ふるさと”の再生に寄与できることを願っています。また、この報告書が多くの方々の目にとまり、被災地の方言の将来について考えるひとつのきっかけとなることを期待します。

それにしても、こうした文化庁の事業はたいへん貴重です。方言は地域の文化の根底にあるにもかかわらず、被災地の方言についての取り組みは途に就いたばかりといってよい状態です。いまだに多くの地域の方言が、保存・継承の取り組みを必要としています。文化庁には、今後もこうした活動への支援を期待したいと思います。

2018 年 3 月 11 日

東北大学大学院文学研究科・
東北大学方言研究センター教授

小　林　　隆

【事業の概要】

1. 事業の目的

本書は、2017（平成 29）年度の文化庁委託事業「被災地における方言の活性化支援事業」のうち、東北大学方言研究センターが担当した「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」の報告書である。

宮城県沿岸部の住民は東日本大震災を契機に、方言が地域の貴重な文化であり、復興への精神的な支えであることを強く認識し、その保存・継承を望んでいる。しかし、当該地域の方言は、震災の影響により衰退に向けた速度を速めつつある。地域住民の願いである方言の保存･継承のためには､その地域の方言の精密な記録や音声での保存が必要である。そのような趣旨に立ち、被災地の方言を記録し公開する企画を行うことにする。

2. 企画の概要

(1)気仙沼市における日常会話を踏まえた方言の記述

①宮城県内の方言区画を考慮し、北部の気仙沼市と、南部の名取市を具体的な対象地域とする。伝統方言の記録・継承のために、高年層を話者とする。

②気仙沼市では、昨年度まで取り組んできた日常会話の収録作業を踏まえ、臨地面接型の調査により、さまざまな角度から方言の記述を行う。

(2)名取市における市民団体の協力による方言資料の音声化

③名取市では、櫛引祐希子氏（追手門学院大学経済学部講師）および市民団体「方言を語り残そう会」の協力のもとに、これまでこの会が作成してきた方言資料の音声化を行う。

(3)東日本大震災と方言ネットでの公開

④上記②③の成果を報告書およびＣＤにまとめ、被災地の公共機関をはじめ方言の保存・継承に取り組む人や団体に配布する。

⑤上記④の内容を東北大学で運営するホームページ「東日本大震災と方言ネット」にも掲載し、利用の拡大を図る。

３．実施体制

代表者　小林　隆（東北大学大学院文学研究科教授）

幹　事　小原雄次郎（東北大学大学院文学研究科大学院生）

　　佐藤亜実（東北大学大学院文学研究科大学院生）

協力者　櫛引祐希子（追手門学院大学経済学部講師）

　　金岡律子（名取市方言を語り残そう会代表）

４．協力機関

気仙沼市教育委員会生涯学習課

方言を語り残そう会（名取市）

第１部

宮城県気仙沼市方言の調査報告

調査の概要

小 林　　隆

1　調査の目的

東北大学方言研究センターでは、学生たちが主体となって東日本大震災と方言をめぐる取り組みを行っている。被災地の方言会話を収録した会話集とＣＤの作成、インターネットを通じての公開はその成果のひとつである。被災地の方言を会話資料のかたちで残そうという取り組みは、5 年前から始まった。その成果はこれまで次に上げる会話集としてまとめてきた。

『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集－宮城県沿岸 15 市町－』（2012 年度）

※http://www.sinsaihougen.jp/センターの取り組み/伝える-励ます-学ぶ-被災地方言会話集/

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話－』（2013 年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話 2－』（2014 年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話 3－』（2015 年度）

『生活を伝える被災地方言会話集－宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話 4－』（2016 年度）

※http://www.sinsaihougen.jp/センターの取り組み/生活を伝える被災地方言会話集/

これらの取り組みの特徴は、地域の言語生活、すなわち、そこに暮らす人々の、言葉による生活の様子を、生き生きとしたかたちで後世に伝える記録を作りたいと考えた点にある。

以上のような方言会話資料を分析し、その結果を補完・発展させるための臨地面接調査を実施することが今年度のテーマである。方言の継承に向けた基礎作業としては、地域の実際の会話を記録することが必要であると同時に、その方言の言語としての特徴を分析的に把握することも重要である。今年度は後者の課題の実践を目指すことにした。

2　調査地域とテーマ

今年度の調査地域は宮城県気仙沼市である。これまで作成してきた気仙沼市の方言会話資料の中から具体的なテーマを発掘し、その課題について面接調査を企画した。何をテーマとするかは、担当者それぞれの興味に従うことにした。

今回調査を行った具体的なテーマを紹介しよう。音韻・アクセント、文法、語彙、そして、言語行動・談話といった広い範囲から 15 の課題を選んでいる。担当者も合わせて示すことにする。

〇音韻・アクセント

・語中/k//t/音の有声化（大山雄輔・王雨・酈淑雯）

・アクセント規則（寺嶋大輔）

〇文法

・テンス・アスペクト（津田智史）
・条件表現の接続助詞「ケ」の用法（齋藤すみれ・佐藤隆彰・三浦真貴）
・「モノ」系終助詞の形態と用法（小原雄次郎）
・終助詞「ス」の意味・用法と使用意識（小林冴・今野貴之・島田彩花）
・丁寧表現－ムード形式、丁寧表現・卑罵表現－（竹田晃子）
・文末詞「（ラ）イン」の丁寧度（八巻千穂・呉雪児・劉海燕）

〇語彙
・感動詞「ダレ」の用法（坂喜美佳）
・接尾辞「ラヘン」の用法（佐藤亜実）
・方言語彙「トゼン」類の形態と意味（八木澤亮・魏鈺涵）

〇言語行動・談話
・言語行動－あいさつ－（中西太郎）
・評価に関わる言語行動－叱る・褒める・非難する等－（椎名渉子）
・「依頼」と「申し出」、および、その「受け」の様相（小林隆・アッニサ リズカ ラマダニ・張暐翎）
・自由会話の収録と分析（太田有紀）

3　調査の担当者

上にテーマごとの担当者を示したが、その所属は次のようになっている。

教員：小林隆、甲田直美（東北大学）、竹田晃子（立命館大学）、中西太郎（目白大学）、椎名渉子（フェリス女学院大学）、津田智史（宮城教育大学）、坂喜美佳（仙台青葉学院短期大学）

大学院生・研究生：佐藤亜実、小原雄次郎、太田有紀、寺嶋大輔、大山雄輔、王雨、酈淑雯、八木澤亮、魏鈺涵、八巻千穂、呉雪児、劉海燕

学部生・聴講生：小林冴、今野貴之、島田彩花、齋藤すみれ、佐藤隆彰、三浦真貴、アッニサ・リズカ・ラマダニ、張暐翎

以上のように、東北大学文学研究科国語学研究室の大学院生・学部生を中心に、研究室 OB の研究者も参加して調査を企画・実施した。特に幹事・副幹事が全体を統括し、調査を導いた。今年度の幹事は次の 2 名である。

幹事：小原雄次郎、佐藤亜実

4　調査の方法

調査は上にも述べたように臨地面接調査の方式で行った。具体的なことは次のとおりである。

調査時期：2017 年 8 月 3 日～8 月 5 日

調査場所：気仙沼市民会館

話者：老年層（60 歳代～70 歳代）34 名
若年層（20 代前半）6 名
調査協力機関：気仙沼市教育委員会生涯学習課　幡野寛治氏、鈴木志穂氏
気仙沼市民会館

調査の実施にあたっては、話者の推薦から日程の調整、調査会場の確保に至るまで、気仙沼市教育委員会生涯学習課から多大なご支援をいただくことができた。また、気仙沼市民会館には調査会場の借用等でたいへんお世話になった。さらに、話者の方々にはご多忙の中、会場まで足を運んで調査に応じていただいた。これらの方々のご協力なくしては、この調査は実現しなかったと言ってよい。ここにあらためてお礼を申し上げ、感謝の意を表する次第である。

5　報告書の作成

この報告書は、各テーマの担当者が執筆を行ったものである。ただし、今回は大学院生、および、仙台市在住の研究者の報告のみに絞り、全体の成果については今後を期すことにした。

また、成果報告のための費用は平成 29 年度被災地における方言の活性化支援事業「被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開」から支援を受けている。

なお、気仙沼市方言については、かつて次の調査報告を行っている。

小林隆編（2012）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

この成果は、次の報告書の中にも収められている。

東北大学方言研究センター（2012）『東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究（文化庁委託事業報告書）』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

今回の調査は、以上の内容を補完する位置付けにあるものと考えることもできる。合わせてご覧いただくことを期待したい。

語中/k//t/音の有声化

大山　雄輔

1　調査の目的

東北方言全体に通底する顕著な音声的現象として、母音間における/k//t/音の有声化が認められるが、その有声化は/k//t/音の前後の音環境によっては阻止される傾向がある。この傾向については大橋(2002)などにより詳細な分析が試みられており、/k//t/音の有声化が生じるかどうかを判別する指標となる音環境は図１のように整理することができる。

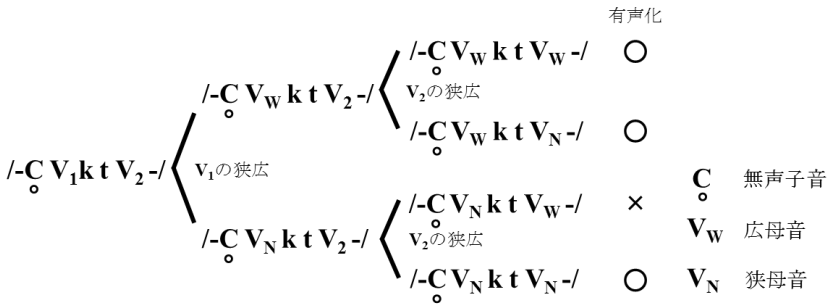


図１　東北方言における有声化阻止の条件

具体的には無声子音＋狭母音(i,u)＋/k//t/＋広母音(a,e,o)：$\mathring{C}+V_N+$/k//t/$+V_W$という構造を有するときに、狭母音V_Nの無声化が生じながら/k//t/音の有声化が阻止される。つまり子音と母音の無声性が同化を起こすことがこの現象を生じさせている。その他の前後構造の場合には原則として有声化する傾向があるが、有声音節が隣接しているかといった他の要因も/k//t/音の有声化に関与しており、東北方言の音声現象として全域的に観察される現象でありながらその実情は複雑である。本調査は気仙沼市方言における/k//t/音の有声化の基本的傾向を観察・検討し、従来指摘されてきた有声化現象と照らし合わせながらその実態を把握することを目的として行った。

2　調査項目と調査票の作成

2.1　調査項目

/k//t/音の有声化の基本的傾向を観察・検討するために/k//t/音が様々な音環境に置かれた単語を選択して短文に埋め込み読み上げをお願いした。短文に埋め込んだのは、単語単独で読み上げをお願いしたときに比べて、より実際に発話を行うときに近い発音が観測できるのではないかと予想してのことである。/k//t/音の周囲の音環境は、まず以下のように設定した。

1)　/-(C)V_W k tV_W -/
2)　/-(C)V_W k tV_N -/
3)　/-C V_N k tV_N -/
4)　/-C̥ V_N k tV_W -/

1)から 3)までは、/k//t/音の前後が 1)どちらも広母音、2)広母音と狭母音、3)どちらも狭母音　という音環境であり、それに前接する子音 C がどのようなものであっても、原則として/k//t/音の有声化が生じることが期待される。本調査では 1)から 2)の各項目について、

ⅰ）　子音 C がない
ⅱ）　子音 C が有声子音
ⅲ）　子音 C が無声子音

という場合分けを行い、その音環境に対応するような単語を含む短文を用意した。4)は無声子音＋狭母音(i,u)＋/k//t/＋広母音(a,e,o)：C̥+V_N+/k//t/+V_W という音環境であり、1 節で述べた通り/k//t/音の有声化が期待できないものである。まとめると、1)から 3)は/k//t/音の有声化が生じ、4)は生じないという結果が予想される。

2.2　調査方法・話者の概要

調査の際には話者に短文が印刷された原稿を渡し、各短文につき 2 回ずつの読み上げをお願いした。聞き取りが困難だった際には再度の読み上げをお願いし、適宜質問を行うという形式を取った。話者の概要は以下のとおりである。

話者A　男性　70歳　気仙沼市出身
話者B　男性　63歳　気仙沼市出身
話者C　男性　74歳　気仙沼市出身

3　調査結果

音環境	単語		期待される有声化	A	B	C
/-(C) V_W k t V_W -/	垢	aka	○	×	○	×
	中	naka	○	○	○	×
	鷹	taka	○	○	○	△注1
	頭	atama	○	△	○	△
	股	mata	○	△	–	–
	肩	kata	○	×	○	○
	猫	neko	○	×	○	○
	てこ	teko	○	×	○	○
	干支	eto	○	×	○	△
	下駄	geta	○	×	○	○
	桁	keta	○	△	○	△
	桶	oke	○	×	○	○
	模型	mokei	○	×	×	×
	苔	koke	○	×	○	△
	大人	otona	○	×	△	△
	ふもと	humoto	○	△	△	○
	外	soto	○	×	○	○
/-(C) V_W k t V_N -/	秋	aki	○	○	○	△注2
	薪	maki	○	○	○	○
	蠣	kaki	○	×	○	△注2
	暑い	atui	○	○	○	○
	夏	natu	○	×	○	○
	お札	osatu	○	×	○	×
	駅	eki	○	△	○	△注2
	招き猫	manekineko	○	×	○	○
	咳	seki	○	×	○	○
	越後	etigo	○	△	×	×
	熱	netu	○	×	○	○
	季節	kisetu	○	×	○	○
	奥	oku	○	○	○	○
	毒	doku	○	○	○	○
	解く	toku	○	×	○	×
	お釣り	oturi	○	×	○	×
	餅	moti	○	×	○	○
	とちのみ	totinomi	○	×	○	×
/-C̥ V_N k t V_N -/	結婚式	kekkonsiki	○	○	○	○
	机	tukue	○	×	○	○
	菊	kiku	○	×	○	×
	低い	hikui	○	△	○	○
	袋	hukuro	○	×	○	×
	七五三	sitigosan	○	×	×	×
	筒	tutu	○	×	○	×
	靴	kutu	○	×	○	×
	普通	hutu:	○	×	×	×

音環境	単語		期待される有声化	A	B	C
/-C V_N k t V_N -/	不気味	bukimi	○		○	△注 2
	ゴミ袋	gomibukuro	○		○	○
	歯茎	haguki	○		○	△注 2
	又聞き	matagiki	○		○	–
	力ずく	tikarazuku	○		○	○
	三日月	mikazuki	○		△	○
	大仏	daibutu	○		○	×
	長靴	nagagutu	○		○	○
	愚痴	guti	○		○	×
	米びつ	komebitu	○		○	–
	実物大	zitubutudai	○		△	×
/-C̥ V_N k t V_W -/	機関車	kikansha	×	×	×	×
	危険	kiken	×	×	×	×
	深い	hukai	×	×	×	×
	不幸	hukou	×	×	×	×
	フケ	huke	×	×	×	×
	彦星	hikobosi	×	×	×	×
	北	kita	×	×	×	×
	汽笛	kiteki	×	×	×	×
	ツタ	tuta	×	×	×	×
	太い	hutoi	×	×	×	×
	捨てる	suteru	×	×	×	×
	人	hito	×	×	×	×

表1　調査結果

○　有声化が確認されたもの

×　有声化が確認されなかったもの

△　有声・無声音のユレが認められたもの

―　普段用いない、あるいは該当語の方言形の音声が異なっていたもの

3.1　/-(C)V_W k tV_W -/　（有声化が期待される）

一般に広母音は無声化が期待できないため、/-(C)V_W k t-/の V_W の無声化と連動している/k//t/音の無声化も生じないと考えられる。そのため、/-(C)V_W k tV_W -/タイプ音環境では/k//t/音が有声化することが想定される。調査の結果、話者 A の有声化が散発的であるのに対し、話者 B、C は多くの語で有声化が認められた。話者 A は「このような(対面調査のような)状況設定では方言は出にくい」との旨を話しており、本調査全体を俯瞰しても有声化の頻度は低い。共通語的発音に傾斜している可能性も考えられる。全体を見ると話者 B が有声・無声のユレはあるものの有声化の頻度が最も高く、「模型」を除いたすべての語が有声化を起こしうるという結果となった。話者 B、C の結果は従来より指摘されている規則を反映していると考えてよいと思われる。

3.2　/-(C)V_Wk tV_N-/　（有声化が期待される）

この音環境は 3.1 に類似している。/-CV_Wk t-/の V_W に無声化が期待できないため、それと連動した/k//t/音の無声化も生じないと考えられる。調査の結果、有声化の状況は 3.1 に類似していた。話者 A の有声化は散発的であり、対する話者 B は「越後」を除く全ての語が有声化していた。これまでに指摘されている規則から期待される有声化が観察された。話者 C も有声化の頻度は高いと言えるが、一部の語で有声・無声のユレに加え口蓋化のユレが生じている点が特徴的である。これについては注を参照されたい.

3.3　/-CV_Nk tV_N-/　（有声化が期待される）

「結婚式」から「普通」までが/-C̥ V_Nk tV_N-/ :すなわち問題とする音環境に無声子音が前接している語、「不気味」から「実物大」までが/-C V_Nk tV_N-/ :すなわち問題とする音環境に有声子音が前接している語である。話者 A は調査時間配分の不備により調査が行えなかったため、話者 B と C の結果を比較する。

話者 B は「七五三」と「普通」を除く全ての語に有声化の傾向が見られる。従来指摘されている規則によれば当該の音環境は有声化が期待でき、話者 B の発音はそれを強く反映していると言える。一方の話者 C は/-C̥ V_Nk tV_N-/構造の場合に有声化の頻度が低下しており、特に「菊」と「筒」の 2 語については調査員が確認のために発した有声化させた発音に違和感を示した．全体を俯瞰すると、3.1、3.2 で取り上げた音環境に比べて有声化が生じにくく、特に/-C̥ V_Nk tV_N-/構造の場合にその度合いが強い可能性がある。これについては 3.5 で考察を加える。

3.4　/-C̥V_Nk tV_W-/　（有声化が期待されない）

調査の結果、A、B、C の全話者が有声化を起こさなかった。3.1 から 3.3 までの調査結果と比較すると、その回答の一致は徹底したものである。これまでに指摘された「無声子音＋狭母音(i,u)＋/k//t/＋広母音(a,e,o)：C̥$_1$+V_N +/k//t/+V_W という構造を有するときに、狭母音 V_N の無声化が生じながら/k//t/音の有声化が阻止される」という規則は現在でも強固に保たれていた。

3.5　/-C̥$V_{W/N}$k t$V_{W/N}$-/タイプの音環境における/k//t/音の有声化の比較

最後に、全調査項目のうち/-C̥$V_{W/N}$k t$V_{W/N}$-/すなわち「無声子音＋任意の母音(a,e,i,o,u)＋/k//t/＋任意の母音(a,e,i,o,u)」という音環境を持つものを取り出し、どういった音環境の場合に優先して有声化が生じるのか考察したい。なお、ここで/k//t/音に前接する子音を無声子音に限定したのは、有声化が期待できない/-C̥V_Nk tV_W-/タイプの音環境とまとめて統一させ比較するためである。

音環境	単語		期待される有声化	A	B	C
/-C̥ V_W k t V_W -/	鷹	taka	○	○	○	△注 1
	肩	kata	○	×	○	○
	てこ	teko	○	×	○	○
	桁	keta	○	△	○	△
	苔	koke	○	×	○	△
	外	soto	○	×	○	○
/- C̥ V_W k t V_N -/	蠣	kaki	○	×	○	△注 2
	お札	osatu	○	×	○	×
	咳	seki	○	×	○	○
	季節	kisetu	○	×	○	○
	解く	toku	○	×	○	×
	とちのみ	totinomi	○	×	○	×
/-C̥ V_N k t V_N -/	結婚式	kekkonsiki	○	○	○	○
	机	tukue	○	×	○	○
	菊	kiku	○	×	○	×
	低い	hikui	○	△	○	○
	袋	hukuro	○	×	○	×
	七五三	sitigosan	○	×	×	×
	筒	tutu	○	×	○	×
	靴	kutu	○	×	○	×
	普通	hutu:	○	×	×	×
/-C̥ V_N k t V_W -/	機関車	kikansha	×	×	×	×
	危険	kiken	×	×	×	×
	深い	hukai	×	×	×	×
	不幸	hukou	×	×	×	×
	フケ	huke	×	×	×	×
	彦星	hikobosi	×	×	×	×
	北	kita	×	×	×	×
	汽笛	kiteki	×	×	×	×
	ツタ	tuta	×	×	×	×
	太い	hutoi	×	×	×	×
	捨てる	suteru	×	×	×	×
	人	hito	×	×	×	×

表 2　/-C̥$V_{W/N}$k tV$_{W/N}$-/タイプの音環境における/k//t/音の有声化

表 2 は全調査項目から/-C̥$V_{W/N}$k tV$_{W/N}$-/タイプの音環境を持つ語を抜き出したものである。全体を通して前述のとおり話者 A は有声化が期待できない場合はもちろんのこと、有声化が期待される音環境下でも有声化が生じにくいことが分かる。一方の話者 B は、有声化が期待される場合は高い

頻度で有声化し、期待されない場合は徹底して有声化しないというこれまでに報告された東北方言の有声化現象と合致している。話者 C は話者 A と話者 B の中間的様相と言ってよいだろう。

ここで、音環境下で個別に有声化の様子を見ると/-$\underset{\circ}{C}V_W$k tV_W-/、/-$\underset{\circ}{C}V_W$k tV_N-/、/-$\underset{\circ}{C}V_N$k tV_N-/、/-$\underset{\circ}{C}V_N$k tV_W-/という順番に有声化が起こりにくくなっていることが見て取れる。つまり表 2 の中で上から下に行くにつれて徐々に有声化が起きにくくなっていることが分かる。ここから、有声化が生じると期待される音環境の中にも、とりわけ起きやすい環境とそうでないものというグラデーションが存在している可能性が読み取れる。すなわち図 2 のような状況が想定できる：

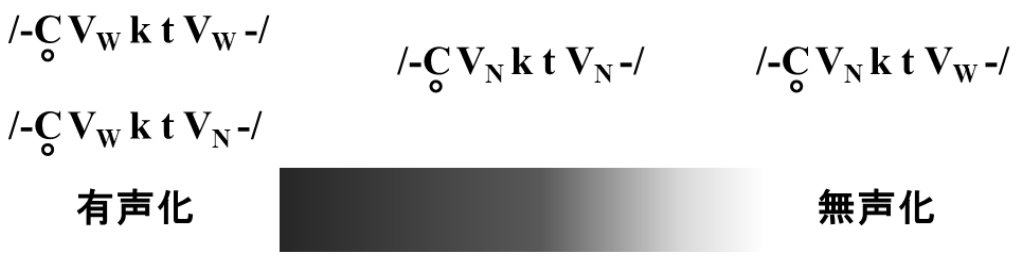


図 2　/-$\underset{\circ}{C}V_{W/N}$k t$V_{W/N}$-/タイプの音環境における/k//t/音の有声化・無声化の段階性

これについては、斎藤(1992)にある「母音無声化の「広さ」の段階基準」(図 3)が参考になると考えられる。

① /-$\underset{\circ}{C}$ V_{N1} k t V_W -/　段階a　V_{N1}が音環境①・②において無声化しない
　段階b　V_{N1}が音環境①において無声化するが，音環境②においては無声化しない
② /-$\underset{\circ}{C}$ V_{N1} k t V_{N2} -/　段階c　V_{N1}が音環境①・②両方で無声化する

図 3　母音無声化の「広さ」の段階基準(斎藤(1992)をもとに一部改変・作成)

図 3 は、同(1992)で述べられている「母音無声化の「広さ」の段階基準」を本調査の調査項目に合わせて改変したものである。図 3 のテーマは母音無声化の「広さ」であるが、この母音(図中 V_{N1})の無声化が後続する/k//t/音無声化を誘発するため、図 3 における段階 a~c は

段階 a　音環境①・②において/k//t/音が有声化する
段階 b　音環境①においては/k//t/音が有声化しないが、音環境②においては有声化する
段階 c　音環境①・②において/k//t/音が有声化しない

と読み替えることができる。

同(1992)ではそれまでの方言調査の結果をもとに、図 3 の中で山形県大島方言を段階 a、岩手方言を段階 b、東京方言を段階 c に位置づけている。1 節の図 1 に示した東北方言における有声化阻止の条件はこの中で段階 b に位置する。本調査の結果で図 3 で音構造①に相当する/-$\underset{\circ}{C}V_N$k tV_W-/という構造下で徹底して/k//t/音が有声化しなかったこと、図 3 の中で音環境②に属する/-$\underset{\circ}{C}V_N$k tV_N-/という構造下で有声化した割合が低下していたことを合わせると、気仙沼市方言における/k//t/音の有声化の状況は段階 b と段階 c の中間に位置すると考えられる。つまり同(1992)に挙げられた代表地点に読み替えるならば岩手方言と東京方言の中間状態にあると言える。これが共通語化により東京方言的な段階 c に移行する過渡的様相をとらえたものかは判断しがたいが、東北方言に通底すると考えられていた/k//t/音の有声化とはやや異なった側面が存在していたことを述べておく。

4　まとめ

本調査では、3人の高齢層話者を対象に気仙沼市方言における母音間の/k//t/音の有声化現象を扱った。その結果、これまでに指摘された「無声子音＋狭母音(i,u)＋/k//t/＋広母音(a,e,o)：$\underset{\circ}{C}_1$+V_N+/k//t/+V_Wという構造を有するときに、狭母音V_Nの無声化が生じながら/k//t/音の有声化が阻止される」という規則が保たれていることが確認できた。「有声化が阻止される環境にない音環境では有声化する」という傾向も確認できたが、その発音の実態は散発的であり、有声・無声のユレが観察されたことに加え、話者ごとのばらつきも表れている。本調査の結果からは、気仙沼市方言における/k//t/音の有声化現象は

1)/k//t/音の有声化が阻止される音環境は先行研究の結果と合致し、東北他地域の方言と同様のものである
2)/k//t/音の有声化が阻止される音環境にない場合には有声化する傾向にあるが、有声化がどの程度生じるかは個人差が大きい
3)有声化が期待される音環境の中では、/k//t/音が狭母音に挟まれた/-V_Nk tV_N-/という配置の場合が最も有声化しにくい。その中でもとりわけ無声子音が前接した/-$\underset{\circ}{C}$ V_Nk tV_N-/ という配置の場合にこの傾向が顕著である可能性があり、これは東京方言などに見られる特徴への接近とも考えられる

と総括することができる。

注

1　話者 C に対し「鷹」の発音を依頼したところ、「鷹」と「たが」は異なっているという意見を聞くことができた。「鷹」と異なり「たが」の方は「タンガ」[taŋŋa] のように鼻音化し、発音し分けられているようである。

2　話者 C に対し「秋」の発音を依頼したところ、有声化を起こしていない [akï] 加えて口蓋化を起こした [atɕï]、有声化に加え口蓋化した[agᶼ ï]が観察された。全体的に話者 C は/ki/の口蓋化が顕著であった。

参考文献

大橋純一(2002)『東北方言音声の研究』おうふう
斎藤孝滋(1992)「母音無声化の「広さ」と「強さ」－岩手方言を中心として－」『国語学研究』31

アクセント規則

寺　嶋　大　輔

1　調査の目的

宮城県北端の沿岸部に位置する気仙沼市の方言は、アクセントの側面から見ると、特殊音調Ⅱ（平山、1957）、南奥特殊アクセント（田中、2005）と呼ばれる地域に属しており、この地域の典型的なアクセントパターンを有すると考えられている。

一方で、気仙沼市はすぐ北を岩手県の陸前高田市と隣接する。この陸前高田市を含めた、大船渡市、高田町、そして旧唐丹村（現釜石市の一部）一帯の方言は、山浦（2000）が「ケセン語」と呼んでおり、この地域のアクセントは独自の規則を持つという。

今回の調査では、気仙沼方言のアクセント規則にもケセン語との類似性が見られるか、特に尾高語のふるまいに注目して確認することを試みた。

なお、東北方言が音節（シラビーム）言語であるかモーラ言語であるかは議論の分かれるところではあるが、本文ではひとまず、特に断りがない限りモーラ言語とみなし、拍単位で分析を行う。

2　総論

2.1　先行研究

2.1.1　ケセン語のアクセント規則

ここでは、山浦（2000）の記述するケセン語のアクセント規則について簡潔に説明する。なお、山浦はケセン語を音節言語とみなしているため、ここでは氏の表記にもとづき、音節によって説明をする。

・語頭の高音を嫌う傾向がある
・高音は連続せずに、単立的にあらわれる

これらの特徴については、周辺の南奥特殊アクセント（田中、2005）にも見られる。

・助詞の第 1 音節で高音があらわれる語がある

他の地域には見られないケセン語特有の現象である。例えば、山（ヤマ）や犬（イヌ）は、南奥特殊アクセントでは単体で◯●、助詞つきだと◯●∆という形で実現するが、ケセン語ではこれが単

体で○○、助詞つきでは○○▲となる[注1]。山浦は、このような性質を②型音調と呼び、語自体がアクセントを持つ①型音調や、語自体はアクセントを持たない③型音調と区別する。

・n+2 種類のアクセントパターンを持つ

本来アクセントを担うべき箇所が特殊拍や無声音だったときなどは、アクセントは前方に移動する。この現象は、語頭のアクセントを避ける規則よりも優先されるため、ケセン語にも語頭にアクセントを持つ語は少数ながら存在することになる。さらに、先述の助詞にアクセントがあらわれる②型名詞、単語自体はアクセント情報を持たない③型名詞（無アクセント語）も加えると、ケセン語の名詞は n 音節に対して n+2 種類のアクセントパターンを持つと山浦は述べている。

その他の特徴としては、以下のようなものが挙げられる。

・1 音節語のアクセントは●△、○▲、○△の 3 パターンがあり、●△は主に近代的語彙（「市」、「都」など）がこれに属する

・助詞自体もアクセント情報を持つが、前接の名詞部がアクセント情報を持っている場合は助詞のアクセント情報は表出されず、名詞部が無アクセント語であった場合のみ助詞アクセントが実現する（マデ＝△▲、ヨリ＝▲△、バリ＝△△など）

以上も踏まえつつ、2 拍名詞におけるケセン語アクセントと南奥特殊アクセント、そして共通語アクセントを類によって比較すると、以下のようになる。

<table>
<tr><th></th><th>ケセン語アクセント</th><th>南奥特殊アクセント</th><th>共通語アクセント</th></tr>
<tr><td>第 1 類</td><td rowspan="2">○○△</td><td rowspan="2">○○△</td><td>○●▲</td></tr>
<tr><td>第 2 類</td><td rowspan="2">○●△</td></tr>
<tr><td>第 3 類</td><td>○○▲</td><td rowspan="3">○●△</td></tr>
<tr><td>第 4 類</td><td rowspan="2">○●△</td><td rowspan="2">●○△</td></tr>
<tr><td>第 5 類</td></tr>
</table>

表１．2 拍名詞のアクセントパターン比較

2.1.2　気仙沼方言の先行調査

近年の気仙沼方言のアクセントについて調査されたものとしては、佐藤（2012）がある。

この調査では、調査対象者に対象語をともなった単純な文を発話してもらい、そのときのアクセントの実現状況を記録している。1 拍〜3 拍名詞をこの方法で試したところ、以下のような結果となった（なお、山浦（2000）がアクセントの弁別で用いている「①、②、③型」と、佐藤（2012）が用いた「0、1、2…型」とは、意味が根本的に異なることを、ここで確認しておきたい）。

・1 拍名詞を除いて、語頭ではアクセントはあらわれない
・1 拍名詞では第 1 類は 0 型（単語内に高音がない）、第 2・3 類は 1 型（単語の第 1 拍に高音）の 2 種類のアクセントパターンが見られた
・2 拍名詞では、第 1・2 類は 0 型、第 3〜5 類は 2 型（単語の第 2 拍に高音）の 2 種類のアクセントパターンが見られた
・3 拍名詞では、「桜」類は 0 型、「頭」類と「命」類は多くが 3 型（単語の第 3 拍に高音）、「兎」類と「兜」類は多くが 2 型という傾向の、3 種類のアクセントパターンがみられた

なお、佐藤の調査では、東北方言では格助詞「ガ」「ヲ」を用いないことに着目して、共通語アクセントの影響（共通語的発話）が出ることを期待した助詞つき文と、方言本来のアクセント（方言的発話）が出ることを期待した助詞なし文の 2 通りのパターンを調査するという形式をとっている。上述の結果は「方言的発話」のものだが、助詞位置での音調の上昇の有無を確かめたい今回の調査では、同じ方法を用いることはできない[注2]。

解決策としては、気仙沼方言でも、主格助詞・対格助詞以外の助詞は頻繁に利用されるので、これら以外の助詞を用いた文を読み上げてもらうことで、この方言の助詞つき文のアクセントを調べられることが期待できる。

もしもケセン語と同様のアクセント法則が気仙沼方言にも当てはまるとしたら、佐藤（2012）で単語部の語末にアクセントが置かれていると一律的にみなされていた単語群（例：2 拍名詞なら 2 型、3 拍名詞なら 3 型）は、助詞つきで発音すると、語末部にアクセントがあらわれる語（◯●△）と、助詞の第一拍にアクセントがあらわれる語（◯◯▲）の 2 種類に分けることができる**（仮説 A）**。

あるいは、気仙沼方言はケセン語とは異なるアクセント体系を持っているとしたら、ケセン語の「語末高音①型名詞」と「②型名詞」という 2 種類に分けられる単語群は、佐藤（2012）の調査通り、気仙沼方言では区別されていないと考えることができる**（仮説 B）**。

本実験では、気仙沼方言の母語話者に単純な文の読み上げをしてもらうことで、仮説 A・B のいずれが正しいのか検証する。

2.2　調査概要

調査語には、佐藤（2012）の選定語彙を軸に、1 拍名詞は近代的語彙を、1 拍・2 拍名詞はアクセントが異なるミニマルペアの語を加え、合計 29 語を選んだ。

これらの語について、名詞単独の読み上げと、名詞に 5 種類の助詞（無助詞含む）を後続させた文節を含む文を作成し、それを調査者に読み上げてもらうという形式をとった（文はひとつにつき 2 回読み上げてもらった）。以下が、本調査にあたって選定した語のリストである。

血（○△）	酒（○○△）	桜（○○○△）	
戸（○△）	鮭（○●△）	煙（○○○△）	
都（●△）	垢（○○▲）	鏡（○○●△）	（名詞のみ）
木（○）	赤（○●△）	男（○○○▲）	（無助詞）
気（○△）	鼻（○○△）	頭（○○○▲）	モ（△）
手（○▲）	花（○○▲）	油（○○　△）	マデ（△▲）
市（●△）	石（○○△）	兎（○□○△）	ヨリ（▲△）
詩（○△）	胸（○○△）	狐（○□○△）	バリ（△△）
酢（○▲）	稲（○●△）	後ろ（○○□△）	
	海（○●△）	卵（○□○△）	

表２．本調査に用いた語とケセン語におけるアクセントの実現パターン

なお、本報告で調査対象とした気仙沼方言話者は、1940 年生まれの男性と 1957 年生まれの女性の 2 名である。

2.3　調査結果

調査結果は、以下の通りになった。

2.3.1　話者Ａ（1940 年生まれ、男性）

単語自体がアクセント情報を持たない無アクセント語（ケセン語における③型名詞）は、助詞にアクセントがあらわれる。そのアクセント位置は、若干の例外を含みつつも概ねケセン語における助詞のアクセント法則と同様であった（例：○○＋マデ＝○○△▲、○○＋ヨリ＝○○▲△、○○＋バリ＝○○△△）。

一方で、ケセン語における「②型名詞」（単語に助詞がともなった場合、助詞にアクセントが置かれる語）（例：○○▲△）は、この話者については、名詞の最終拍にアクセントを置いていた（例：○●△△）。つまり、単語本体にアクセントを持つ「①型名詞尾高語」と同様のふるまいをするケースがほとんどであった。

その他、特徴的なアクセントがあらわれた語について述べる。

・「木」、「手」

ケセン語における実現アクセントは○▲だが、この話者は、無助詞文、モ文については単語部にアクセントを置いて発音していた（●、●△）。助詞マデがともなう文はケセン語の規則と同じく、

助詞の第 1 拍マに高音があらわれていた（◯▲∆）。ただし、助詞バリがともなった際は、平板調に実現しており（◯∆∆）、ケセン語と同様のアクセント規則は持たなかった。

・「市」「都」

全体的に高音位置が不安定で、有アクセント的にも無アクセント的にもふるまう現象がみられた。話者 A によると、そもそもこれらの単語を単体で言うような状況が考えられにくいとのことだったので、音調の不安定さはそこに起因すると考えられる。

・「酢」

ほとんどが語頭を高くするという、共通語的な印象を受ける読み上げになっていたが（●∆∆など）、バリがともなったときのみ、助詞にアクセントがあらわれた（◯▲∆）。

・「男」

ケセン語では②型名詞に属する（◯◯◯▲）。この話者の場合は、基本的に語末に高音を置いていたが（◯◯●∆）、助詞バリがともなった場合のみ、ケセン語同様にバに高音を置いた（◯◯◯▲∆）。

・「油」

ケセン語では語末にアクセントを置く①型名詞であり（◯◯●∆）、この話者もほぼ同様のアクセントの振る舞いをしていたが、助詞マデがともなった場合のみ、マに高音を置いていた（◯◯◯▲∆）。

・「バリ」

「1 拍名詞＋バリ」の場合、有アクセント語、無アクセント語の区別問わずほとんどが平板調で実現した（◯∆∆）。

2.3.2　話者Ｂ（1957 年生まれ、女性）

話者 B の場合、無アクセント語・有アクセント語問わず、山浦（2000）によるケセン語の記述や話者 A のアクセントとは異なった振る舞いをすることが多かった。

まず、ケセン語では助詞「マデ」が無アクセント語にともなった場合、後方の「デ」にアクセントを置く（例：◯◯∆▲）。ところが、話者 B の場合は例外なく前方の「マ」を高音にしていた（例：◯◯▲∆）。助詞「バリ」については、ケセン語では無アクセント語にともなうと、文節内に高音はあらわれずに平板調に実現するが（例：◯◯∆∆）、話者 B は一部の単語で第 1 拍のバに高音を置いていた（例：◯◯▲∆）。また、一部の 1 拍語についても、単語内ではなくバに高音があらわれるケースがいくつか見られた（「血」、「戸」、「詩」＋バリ＝◯▲∆）。これらの現象は、いずれも「マデ」は共通語の「まで」、「バリ」は共通語の「ばかり」のアクセントに引きずられた読み方になっていると推測するのが妥当であろう。

このように、1957 年生まれの話者 B のアクセントは、1940 年生まれの話者 A とも異なる様相を見せており、これは助詞のアクセント情報についても、伝統的な方言から変化が起こっていると考えるのが適切であろう。

その他の個別的な特徴は以下のとおりである。

・「男」、「頭」

これらはいずれも○○●が基本アクセントのようだが、助詞マデがともなったとき、マにアクセントが移動していた（○○○▲△）

・「狐」、「石」

これらの単語は、文全体は方言的なアクセントで読んでいても（＝共通語に引きずられた読み方をしていない）、調査語については伝統的なアクセントではなく、共通語的なアクセントで読んでいた（狐＝○●○→○○○）や石＝○○→○●）。

なお、全体的に読み上げる文が、話者 A よりも共通語の影響を受けていると考えられることがかなり多い傾向であり、話者 B 自身も内省によりそれを自認していた。実際、文の読み上げではなく内省的に出てくる発話では、方言的なアクセントになることが多かった。概して、話者 B は、伝統的な気仙沼方言のアクセント的特徴を多く残しているとみられる話者 A よりも、アクセントの共通語化が進行していると考えられる。

2.4　考察

いくつかの例外は見られたものの、今回の調査結果を概括的にまとめると、尾高語は以下のようにふるまったと言える。

1 拍詞

・1 拍の助詞が後続するときは、名詞部に高音が置かれた

・2 拍の助詞が後続するときは、助詞の第 1 拍に高音が置かれた

2 拍名詞

・助詞の長さに関わらず、名詞の末部に高音が置かれた

3 拍名詞

・1 拍の助詞が後続するときは、名詞の末部に高音が置かれた

・2 拍の助詞が後続するときは、名詞の末部に高音が置かれるか助詞の第 1 拍に高音が置かれるかゆれがみられた

一方で、ケセン語のような、ある語は○●△、別の語は○○▲と発音されるというような明確な区別は、今回の調査からは観測できなかった。この結果を見る限りは、仮説 A ではなく仮説 B（気仙沼方言では、ケセン語の「①型名詞尾高型」と「②型名詞」は区別されない）が正しいと言えそうだが、最後にいくつか気づいた点と今後の課題を挙げたい。

まずは、上述の通り、今回の調査ではケセン語における「語末高音①型名詞」と「②型名詞」の区別はあらわれなかった。しかし、だからといってただちに、気仙沼方言に「②型名詞」に該当するものが存在しないと断定できるわけではない。

例えば、当地の方言による自然な言語生活による会話を収録することをコンセプトとした「被災地方言会話集」に収録されている談話音声では、ケセン語における②型名詞について、助詞の位置に高音があらわれている発話を多く聞くことができる（特に、この資料に登場する男性話者は、今回の調査の話者 A と同一人物である）。例えば、「家」（イエ、イイと聞こえることも）は 2 拍第 3 類に属する語で、ケセン語でも②型名詞として分類されている。気仙沼方言では○●と尾高語としてあらわれるが、これに助詞がともなうと、○○▲、○○▲△など、ケセン語のように助詞位置に高音があらわれる発話が多くみられた。今回の調査でそういった現象がみられなかった原因を推測すると、作成した文がそういったアクセントを実現するものでなかったなど調査方法が不十分だったか、あるいは調査が実験室的な環境だったために日常生活的な方言発話があらわれなかったなどの理由で、この話者たちの本来のアクセント情報を十分に引き出せなかったという可能性も十分に考えられる。実際、調査後に話者 B から話を伺うと、「書いたものを読むときと、書かないで自然に言うときとは全然違う言い方になってしまう」と振り返っていた。

次に、今回の調査結果では、「3 拍の名詞＋2 拍の助詞」の読み上げで、○○●△△～○○○▲△というゆれが観測されたが、これは志津川方言のアクセントを調査した大西（1989）のものと類似している。志津川町（現・南三陸町）は気仙沼市の約 30km 南に位置するが、大西によると、ここの方言では、3 音節以上の名詞の語末音節にアクセントを持つ語に助詞マデが後続すると、アクセント位置が助詞のマに移動することが報告されている。ただし、アクセント位置が名詞位置に留まるか助詞位置に移動するかにはゆれがあるという。今回の気仙沼調査の結果が旧志津川町同様にこの地域の方言に広く見られる現象なのか、あるいは個人差なのかは、さらに調査を重ねて検証する必要がある。

また、今回の調査結果では、1 拍名詞と 3 拍名詞について、後続する助詞が 1 拍か 2 拍によって異なったふるまいをみせた。この結果からのみによって一般化することは危険だが、この現象も、今後の調査について示唆を与えてくれる。例えば、五十嵐ら（2012）は琉球宮古語池間方言のアクセントについて調査を行い、この方言のアクセント体系は、従来の研究では二型であるとみなされてきたが、実は三型体系であることを報告している。この中で五十嵐らは、「ある言語・方言のアクセント体系を記述する際に、単独で発話された語または助詞を付けて発話された語を分析するだけでは、誤った結論を導く可能性があることを示している」と述べている。実際、従来のアクセント研究では「名詞＋（1 拍の）助詞」という組み合わせのみを分析することが暗黙の了解として存在していた。今回の調査結果も、五十嵐らの指摘するとおり、何らかの見落とされているアクセント法則が潜んでいるのかもしれない。また、アクセントの「ゆれ」として分析している現象も、あるいは語連鎖などにより何らかの規則が働いて生じた可能性もある。今後は前後の語の組み合わせなどにも考慮しながら調査を行う必要があるだろう。

なお、気仙沼方言の CD 付きテキスト「気仙沼のこばなし」（三陸ことば研究会、2015）に収録されている音声を聞いてみると、ケセン語で②型名詞と分類されている語は、いずれも①型名詞の尾高語と同様に、その単語の末尾拍に高音があらわれており、先述の「ゆれ」もまったく生じない（な

お、この読み上げ CD の方言の語り手は 1974 年生まれである)。この CD の音声と、今回の調査結果とをあわせて推測すると、気仙沼にも、かつてはケセン語同様に「②型音調」、あるいは「②型音調」的特徴に準ずるアクセント現象が存在していたが、それらの語のアクセント位置は、時間の経過と共に単語の末尾へと移動・固定しつつある、と仮定することもできる。いずれにせよ、ここからも気仙沼方言は「伝統的な方言」とみなされてきたアクセントから変化しつつあることを伺わせる。

以上、今回の調査結果についていくつか考察を試みた。この地方の方言のアクセントの変遷については、従来の考えでは単純化が進み、宮城県南部のように無アクセント方言に移行しつつあるという見方が主流であったが、その正確な実態がつまびらかにされないうちに、異なるアクセント体系を持つ共通語に淘汰されつつあるというのが実情である。東日本大震災が沿岸部方言の衰退に追い討ちをかけている今、この地域のアクセント法則の実態について、至急にさらなる調査を続け、考察を深めていく必要がある。

注

1　類似した現象は山形県の鶴岡市方言にもみられる。例えば、2 音節名詞第 3 類は、単体では◯●だが、助詞つきでは◯◯▲となる（新田、1994)。

2　なお、山浦（2000）によると、ケセン語では主格の格助詞は a/ğa が用いられ（直前の音声的環境によって使い分けられる)、対格の格助詞は存在しない代わりに、語末の音調の操作で対格をあらわすという（①型名詞の尾高語 : 拍内下降、②型名詞 : 拍内上昇、それ以外 : 最終拍の長音化）

文　献

五十嵐陽介、田窪行則、林由華、ペラール・トマ、久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』vol.12, pp.134-148

大西拓一郎（1989）宮城県志津川町方言の名詞のアクセント--音節単位によるモーラ方言の分析--」『国語学研究』vol.158, pp.68-81

佐藤亮一（2012）「アクセント - 気仙沼市」小林隆・編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』

三陸ことば研究会（2015)『気仙沼のこばなし』真間書院

田中宣廣（2005)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう

東北大学方言研究センター（2013)『伝える・励ます・学ぶ被災地方言会話集』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

東北大学方言研究センター（2014)『生活を伝える被災地方言会話集１』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

東北大学方言研究センター（2015)『生活を伝える被災地方言会話集２』東北大学大学院文学研究科国語学研究室

東北大学方言研究センター（2016）『生活を伝える被災地方言会話集３』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
東北大学方言研究センター（2017）『生活を伝える被災地方言会話集４』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
新田哲夫（1994）「鶴岡方言のアクセント」国立国語研究所『鶴岡方言の記述的研究』pp.81-140
山浦玄嗣（2000）『ケセン語大辞典』無明舎出版

非実現形式「（危なく）シタ」

津　田　智　史

1　調査の目的

2017 年度におこなった気仙沼市方言調査では、高年層の話者を対象として、当方言のテンス・アスペクトなど時間表現に関する面接調査をおこなった。時間表現といってもさまざまな局面が想定できるが、今回の調査において特に取り上げたのは、過去における非実現形式である。

過去の非実現形式については、『方言文法全国地図』（以下、GAJ と略記）などをみると、全国的に「するところだった」や「しそうだった」「しかけた」といった形式が広く使用されており、とりたてて取り上げられるのは西日本諸方言にみられるシヨッタという形式がほとんどである。ところが、東北大学方言研究センター編の『被災地方言会話集』（以下、『会話集』と略記）をみると、非実現の場面で「（危なく[注1]）シタ」という表現がみられる。語自体としては共通語でもみられるものであるが、表現として若干の違和感を覚えるものである。同一話者からではあるが、この表現は複数回みられることから、気仙沼市の過去の非実現形式と認められるといえよう。そこで、特にこの表現に焦点を当て、「（危なく）シタ」が当該地域においてどのような状況で使用されているのかを明らかにするための調査をおこなった。

本稿では『会話集』にみられるこの「（危なく）シタ」の用法について考察する。ただし、後述するように追加調査の必要もあり、本稿では主に、形式の分布とバリエーション、またその使用条件について言及する。

本稿の内容は次の通りである。2 節では、これまでの方言研究における非実現形式の概要に触れる。3 節では、『会話集』でみられる「（危なく）シタ」の具体例を確認するとともに、ほかの地域での使用を方言地図類や記述報告から確認する。そこから、「（危なく）シタ」形式のバリエーションと分布を明らかにする。4 節では、2017 年度実施の気仙沼市方言調査の結果および先行研究のデータから、「（危なく）シタ」形式の使用されうる条件を、① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差という観点から考察していく。

2　非実現形式の概要

上述のように、これまでの日本語方言における過去の非実現形式に関する報告は、多くの場合、西日本諸方言でみられるシヨッタ（＜もう少しで＞オチヨッタ［落ちるところだった］など）に関わるものがほとんどである。GAJ4 や『新日本言語地図』をみても、その形式の分布が広く認められ、かつ西日本諸方言の進行相を表すとされるヨル形（フリヨル、アルキヨルなど）の分布域にほぼ重なることもあり、その点で注目を集めるものである。一方で、東日本を中心に、スルトコロダ

ッタやシソーダッタという形式が目立つ。以下に、『新日本言語地図』所収の「＜もう少しで＞落ちるところだった」の地図を改編したものを示す。

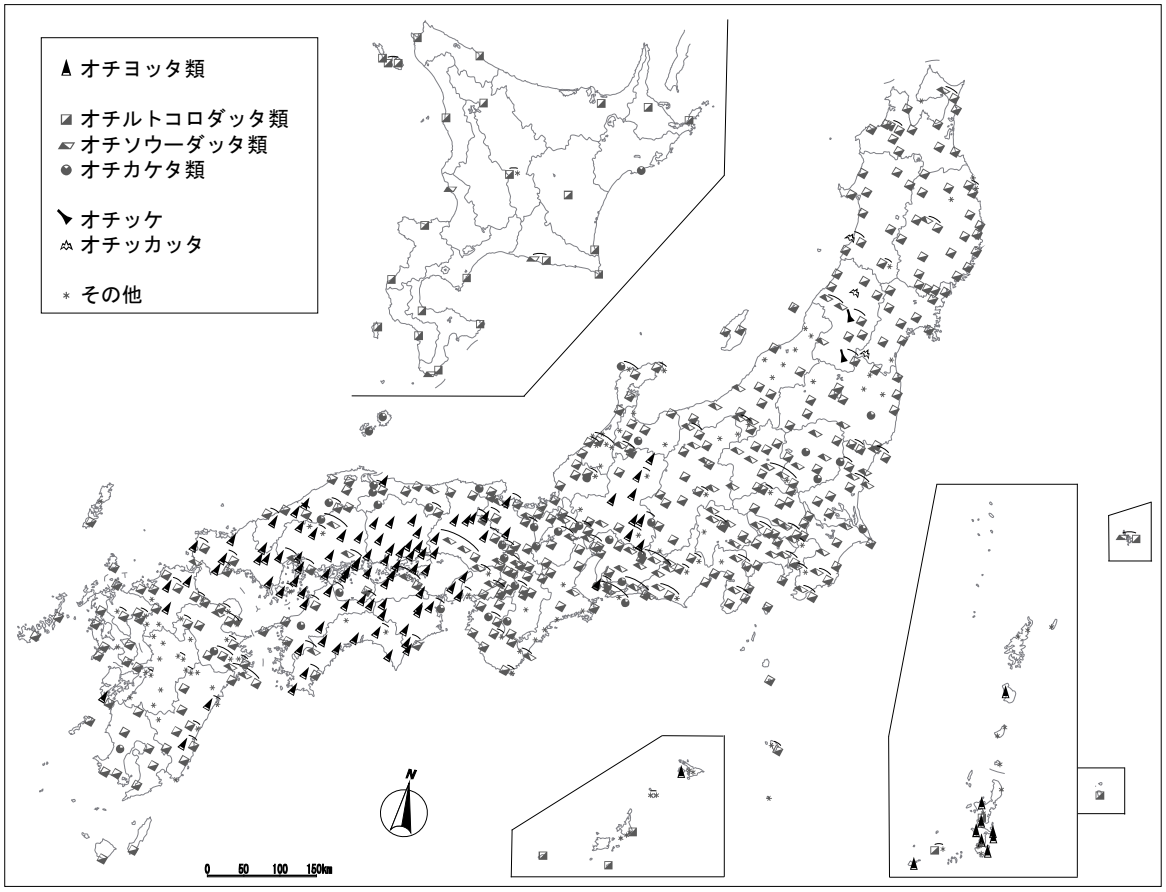


図１　「＜もう少しで＞落ちるところだった」（津田 2016 を改編）

図 1 をみるとわかるように、西日本諸方言にシヨッタが多くみられ、東日本を中心に全国的に、分析的なオチルトコロダッタやオチソーダッタ、オチカケタなどという形式が広く分布している。ここで扱う「（危なく）シタ」の形式は、『新日本言語地図』においては、気仙沼市はじめ宮城県や東北地方でも確認できない[注2]。

3　「（危なく）シタ」形式の用例と分布

ここからは、実際に『会話集』でみられた気仙沼市方言における過去の非実現形式についてみていくことにする。また、東北方言（特に山形県方言）においては、テンス過去を表す形式が複数確認できる。それらの形式についても、過去の非実現を表す際に使用可能であるか、先行研究のデータから探っていくことにする。

3.1　『会話集』にみられる非実現形式

それでは、『会話集』の中で「(危なく) シタ」がどのように使用されているのか、実際の例からみていきたい。下記（1）および（2）は、『会話集 3』の「14 猫を追い払う」場面の実演会話である。例をみてわかるように、「アブナグ　モッテガレダ／カジライダ」といった表現がみられる。なお、「14 猫を追い払う」場面については宮城県名取市方言でも同様に集録・公開されているが、この表現は気仙沼市方言のみで確認できるものである。また、『会話集 3』には（1）（2）のような会話例がみられたのだが、ここに収録されていないものの、3 回目の実演の際にも「(危なく) シタ」が確認できたということである。つまり、同一話者の発話とはいえ、気仙沼市方言ではかなり頻繁に使用される表現であることが窺える。

（1）［気仙沼市］ 14 猫を追い払う〔1〕 ①実演 1 （『会話集 3』）

〈前略〉

004B：アー　サガナ　カレダカ。
　　あー　魚　　食われたか。

005A：クワネドオモーケントー　ドゴノネゴダベー。
　　食わないと思うけれど。　どこの猫だろう。

006B：アーーー　ソガー。
　　あー　　そうか。

007A：イヤー　<u>アブナグ　モッテガレダ</u>ヤー。
　　いや　　危なく　　持っていかれる［ところだった］よ。

〈後略〉

（2）［気仙沼市］ 14 猫を追い払う〔1〕 ②実演 2 （『会話集 3』）

〈前略〉

005A：アー。　サガナ　カジッタイベカ。　アラ　カジッテ、ア　イダネ。　サガナ　アッタ。
　　あー。　魚　　食われたか。　　あら　かじって、あ　あるね。　魚　　あった。

005A：<u>アブナグ　カジライタ</u>デバ。
　　危なく　　かじられる［ところだった］ってば。

006B：アーーー　イガッタ　ホンデア。{息を吸う音} ホンデモナー　カラスーモ
　　あー　　よかった　それでは。{息を吸う音} それでもなあ　カラスも
　　クッカモシンネガラー　アミ　カッテククッガラー。
　　来るかもしれないから　網　　買って×来るから。

007A：アミ　カゲダホ　イーベガネ。
　　網　　掛けた方　いいだろうかね。

008B：ウーーーン。ソノホ　イー。

うーん。　　その方　いい。

009A：イヤーイヤ　<u>アブナグ　モッテガレダ</u>ヤ。

いやいや　　危なく　　持っていかれる［ところだった］よ。

〈後略〉

（3）［気仙沼市］ 24. 猫を追い払う 〔1〕（『会話集 4』）

〈前略〉

002B：ナニシタヤ。

どうしたよ。

003A：ネーゴ　ホラ　イマ　サガナ　クワエデ　アレ（B　ウン）コッチ　ミーミー

猫　　ほら　今　　魚　　くわえて　あれ（B　うん）こっち　見ながら

イッタデバー。

行ったってば。

004B：アー　ソー。

あー　そう。

〈後略〉

一方で『会話集 4』では、（3）をみるとわかるように「(危なく）シタ」は確認できない。ただし、これは文脈による影響がみられるためだと思われる。（1）（2）は猫が魚を持っていきそうになったことを話しているが、（3）では猫がくわえていったことを話している。つまり、「もう少しで」という文脈でなかったために確認できなかったものと考えられる。なお、名取市方言においては、ここでも確認できなかった。

さて、非実現形式についてみていく際に、気をつけなければならないことがある。それは、どの要素が非実現の意味を表しているのか、という点についてである。これに関しては、次のような言及がある。

> 注意が必要なのは、本多（2000）が指摘するように、ここでショッタが非実現の意味を担うかどうかとは別に、非実現の解釈を与える機能を持つ「もう少しで」といった表現の存在である。非実現といった意味がショッタというヨル形によって表される意味なのか、「もう少しで」といった副詞的な要素、もしくはそれとの関わりにより表される意味なのかは確認する必要がある。（津田 2014）

気仙沼市方言の「(危なく）シタ」については、（1）（2）のいずれの例でもアブナグが付随しており、これは非実現の事態を表す際に必須であると考えられる。それは、シタの形式からも窺える。東北方言、特に気仙沼市のシタ形式は、運動動詞ではテンス過去を、存在動詞ではテンスに限らず

継続的な事態を表すものの、それだけで非実現を表すことはない。そうであるならば、「(危なく)シタ」という表現全体で過去の非実現を表しているととらえられよう。

3.2　「(危なく)シタ」形式の分布

ところで、テンス過去を表す形式として、日本語ではシタ形式が使用される地域が多い。ところが、東北方言(特に山形県方言)のテンス過去を表す形式には、いくつかバリエーションがみられる。山形県を中心に、スルガッタやシタガッタのように、カッタ形式がみられる(金田 1983、津田 2011 など)。また、主に回想を表す際に用いられるが、山形県山形市方言においては違ッケ、要ッケなど状態用言にケが接続した場合には、テンス過去を表すという(渋谷 1999)。非実現を表す形式として、「(危なく)シタ」自体の報告はほぼみられないが、上記のようにタ形ではないテンス過去を表す形式の場合についても、さらに確認する必要があるだろう。

まず、工藤編(2001)の各地方言のテンス・アスペクト調査のデータから、山形県南陽市における非実現のデータを抜き出したものをみていく。

(4)山形県南陽市の非実現形式(工藤編 2001 より抜粋)

地域	共通語例文 方言語形	時間的意味	動詞分類など
山形県南陽市	(死にかけたが実際は死ななかったのを話題にして)金魚がもう少しで死ぬところだった	直前＝非実現	主体変化動詞
	キンギョ　イマチットデ　シヌガッタ/シヌドゴダッタ		死ぬ
	(学校に行きかけたが結局行かなかったのを話題にして)もう少しで学校に行くところだった	直前＝非実現	主体変化動詞
	イマスコシデ　ガッコーサ　インカッタ/イグドゴダッタ		行く
	(窓を開けかけたが結局開けなかったのを話題にして)もう少しで窓を開けるところだった	直前＝非実現	主体動作客体変化動詞
	イマスコシデ　アゲッカッタ		開ける
	(飲みそうになったが結局飲まなかったのを話題にして)もう少しでお酒を飲むところだった	直前＝非実現	主体動作動詞
	イマスコシデ　ノムドゴダッタ/ノムドゴダケ/ノムガッタ		飲む

これをみると、南陽市方言では「イマスコシデ　スルガッタ」という形式が頻繁に使用されていることがわかる。また、渋谷(1999)では、「危惧的思い出し」と名付け、ここで扱う「(危なく)シタ」形式を扱っている。

(5)28a もう少しでそのお菓子を**クーケ**ハー

ここでのハーは詠嘆を表すもので、「すべきでないことをしかけた／した」という話し手の気持ちを表出するものだとしている。それにより、(5)は「あやうく食べかけた」という意味を表すとしている(渋谷 1999)。渋谷(1999)は、この用法は一人称でも使用可能なことから、ケの思い出し用法からの拡張用法とする。いずれにしろ、これらはまさしく「(危なく)シタ」と同じく非実現を表すものであろう。

それでは、これらの形式はどういった分布を成しているのだろうか。図 1 の「＜もう少しで＞落ちるところだった(将然相・回想)」の分布をみると、スルガッタ(オズッカッタなど)は秋田県本

荘市、山形県戸沢村、宮城県七ヶ宿町で、スッケ（オジッケなど）は山形県西川町や山形県米沢市でみられることがわかる。山形県を中心にその周辺地域でも確認できる。続いて、GAJ4 の分布についても確認する（図 2)。

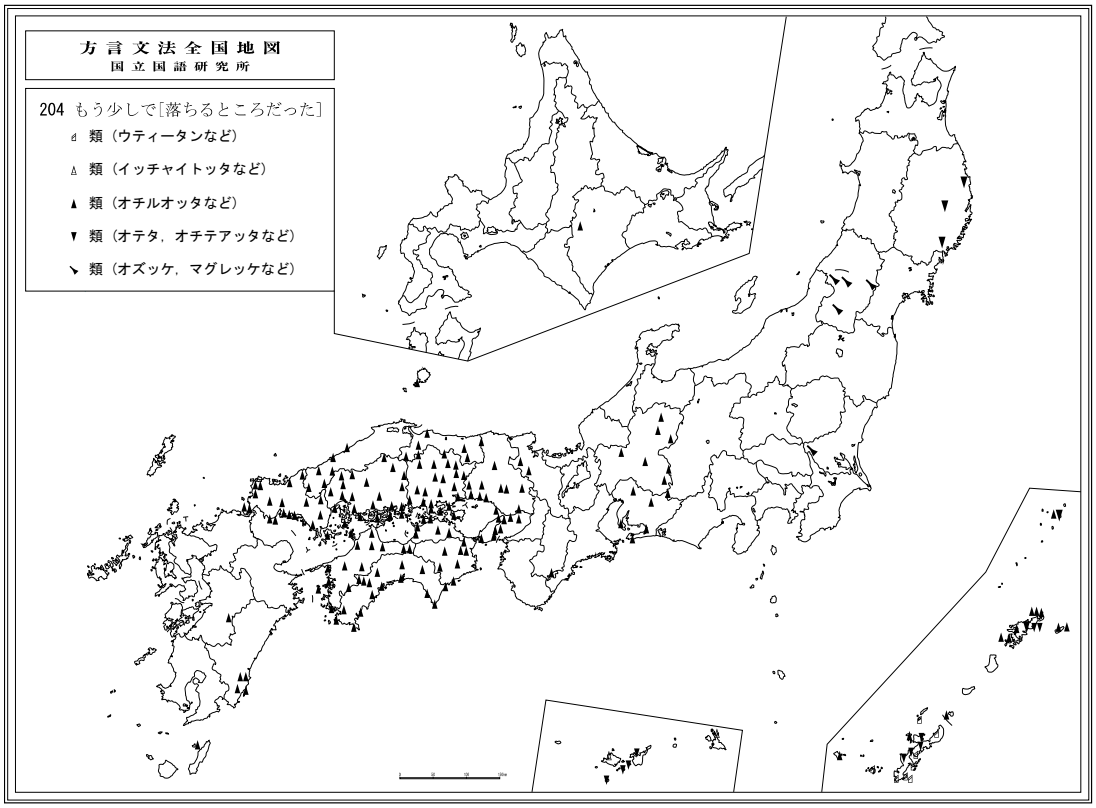


図 2　「もう少しで［落ちるところだった]」（GAJ4 をもとに作成）

図 2 では、スルガッタはみられないが、スッケが山形県と茨城県で確認できる（山形県東根市、山形県西川町、山形県飯豊町、茨城県八千代町)。そして、シタ（オテタなど）が岩手県岩泉町、岩手県川井村、岩手県大船渡市と、鹿児島県十島村および伊仙町で確認できる[注3]。気仙沼市方言は岩手県南部と方言的な類似性も認められるが、この過去の非実現形式においてもその連なりが窺える。さらに、GAJ4 では「[もう少しで］落ちるところだった」という、「もう少しで」の表現に注目した地図も存在する[注4]。それをみると、鹿児島県伊仙町の一回答を除いてなにかしらの表現で回答されており、「もう少しで」という表現が非実現の意味を表す際には必要であることが窺える。

さて、以上みてきたことをまとめると、過去の非実現を表す形式については、東北方言ではいくつかバリエーションが確認できることがわかる。まず、山形県方言を中心に「(危なく）スルガッタ／スッケ」が確認できる。また先行研究の記述等みても、「もう少しで／危なく」の要素は非実現の意味を表すために必須であるといえよう。次に、気仙沼市方言でみられる「(危なく）シタ」であるが、岩手県沿岸部や鹿児島県の島嶼部で確認できる。いずれの場合も、「もう少しで／危なく」の要素が付随していることがほとんどである。ここで挙げた形式は、「もう少しで／危なく」のあとにテ

ンス過去の形式を持つことから、「(危なく）スルガッタ／スッケ」と「(危なく）シタ」を併せて、ここでは「(危なく）シタ」形式と呼ぶことにする。

4　「(危なく）シタ」形式の使用条件

ここまで「(危なく）シタ」形式のバリエーションと分布について確認してきた。ここからは、2017 年 8 月に実施した東北大学国語学研究室の気仙沼市方言調査の結果および先行研究の記述から、「（危なく）シタ」形式の使用条件について考察していきたい。

調査は、2017 年 8 月 3 日から 5 日にかけて、気仙沼市市民会館を会場としておこなわれた。その中で、計 2 名のインフォーマントの協力を得て、過去の非実現形式に関わる調査を実施した。インフォーマントは、高年層の男女各 1 名である。ただし、男性のインフォーマントのみ「(危なく）シタ」形式を「使用する（ことがある）／聞く」との回答を得ており[注5]、もう一方の女性からは確認できなかった。調査項目と観点、結果は次の通りである。

（6）調査項目と結果

調査項目	観点	結果
(1)「もう少しで落ちるところだった」	【主変】(GAJ など)	×
(2)「もう少しで魚がとられるところだった」	【主動客変・受動】(『会話集』)	○（聞く）
(3)「夕飯を食べ始めるところだったよ」	【主動・能動（緊急性低)】	△
(4)「もう少しで食べるところだった」	【主動・能動】	×
(5)「よかった、全部食べられるところだった」	【主動・受動】	○
(6)「もう少しで鍵を閉めるところだったよ」	【主動客変・能動】	△
(7)「もう少しで鍵を閉められるところだった」	【主動客変・受動】	○
(8)「もう少しで怒られるところだった」	【心理・受動】	×
(9)「もう少しで濡れるところだった」	【主変・意味的に受動】	○
(10)「もう少しで見つかるところだった」	【主変・意味的に受動】	△

（6）の調査データと先行研究の記述などをもとにして、以下、① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差という観点から「(危なく）シタ」形式について言及する。

まず① 動詞分類による形式使用の傾向をみることにする。日本語方言のテンス・アスペクト研究では、工藤編（2001）の示すような動詞分類でとらえられることが多い。ここでも、ひとまずその分類から「(危なく）シタ」形式についてみてみる。（6）をみてわかるように、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞といった動詞分類に関わらず、この形式は使用されるようである。これは、（4）で示した山形県南陽市方言における「(危なく）スルガッタ／スッケ」についても同様である。接続する動詞については、少なくとも限界性を基準とする分類による偏りはみられないようである。

次に② ヴォイスの面についてみていく。『会話集』における用例は、全て受身の形（モッテガレダ、カジライタ）であった。調査においては、その点から受身の有無での使用の有無をひとつの観

点として調査をおこなっている。（6）をみる限り、受身でなくても使用できるようではあるが、受身の方が使用されている場合が多い。さらに、動詞の形態として受身形をとるか否かではなく、動詞が意味的に受動の意味合いを含む（主体が何かしらの行為を被る）かどうかという観点からも調査項目をたてている。（6）では、意味的に受動である場合にも、使用されやすいことが窺える。一方で、（4）でみた山形県南陽市方言では、受身の例は出ておらず、能動形でも問題なく使用できることがわかる。受身形はもとより、意味的な受動の場合の報告もみられない。山形県方言ではヴォイスに関わらず使用されているようであるが、気仙沼市方言では受動的な意味の場合の方が使用されやすいようである。ただし、GAJ4 では岩手県などで「（危なく）オテタ」などが使用可能であるようなので、ヴォイスの面についてはさらなる調査・検討が求められる。

最後に③「（危なく）シタ」形式を構成する語の地域差についてみていく。すでにみてきたように、気仙沼市方言では「（危なく）シタ」であり、山形県方言では「（危なく）スルガッタ／スッケ」である。「もう少しで」相当の表現とテンス過去を表す形式が連なることで非実現を表すが、テンス過去の部分の形式には地域差がみられることもあり、過去の非実現を表す「（危なく）シタ」形式としてもバリエーションがみられる。

今回の調査で得られたデータと、先行研究の記述等から「（危なく）シタ」形式の使用条件について① 動詞分類、② ヴォイス、③ 地域差の面からみてきた。差異がみられる点、みられない点はあるものの、いずれにしても気仙沼市における追加調査、また方言間対照を見据え、山形県下などでの調査が求められよう。今後、さらに項目を増やしつつ綿密な調査をおこなっていきたい。

5　まとめと今後の課題

本稿では、『会話集』でみられた過去の非実現を表す「（危なく）シタ」形式について、そのバリエーションや分布を確認してきた。テンス過去形式のバリエーションと平行的に、非実現形式についてもバリエーションがみられた。「（危なく）スルガッタ／スッケ」については、山形県を中心に分布している。一方で、「（危なく）シタ」については、岩手県から宮城県気仙沼市にかけて（および鹿児島県島嶼部に）分布が確認できた。さらに、気仙沼市での方言調査結果やほかの地域における資料をもとに同形式の使用条件について考察してきた。その結果、動詞分類には左右されないが、ヴォイスについては地域により差がみられた。気仙沼市方言では受動あるいは意味的に受動を表す場合に使用されやすいようである。

最後に、今後の課題を挙げておく。本稿 4 節以降については、調査人数、内容等の見直しも含め、今後さらなる調査をおこなう必要がある。本稿の内容を踏まえ綿密な調査計画をたてることが重要となろう。また、そもそも表現を構成する語には地域差がみられることから、語自体の表す意味、表現全体としての用法、接続可能な動詞や使用可能な状況などの地域差についても想定に入れつつ確認する必要がある。

注

1　ショッタをはじめ過去の非実現においては、「危なく」といった副詞の使用がほとんどの場合で確認できる。そうでなければ、文脈で実際には起きなかったことが示される。ただし、その表現は一定ではなく、ここでは『会話集』にみられる形式に代表して「危なく」と示しておく。

2　同様の質問文で調査をおこなっている GAJ4 では「(危なく）シタ」形式は確認できる（本文図 2 を参照)。これについては、GAJ から『新日本言語地図』での経年による変化・衰退、もしくは過去の非実現形式として「(危なく）シタ」形式が認知されていないことによる記録漏れなどが考えられる。共通語においては違和感を覚える表現のため、よりそれらしい分析的なもの（スルトコロダッタ、シソーダッタ、シカケタなど）の記録が優先された可能性はある。

3　図 2 を見てもわかるように、GAJ4 では同系統の記号を琉球方言の回答に当てているが、奄美大島の一部や沖縄本島、南琉球でみられるそれらの記号は、テアッタ相当であることが考えられるため、ここでは考察の対象外とする。本文中にもそれらの地域は取り上げていない。

4　『新日本言語地図』では、「＜もう少しで＞落ちるところだった」の「落ちるところだった」に注目して回答を得ている。その際、「もう少しで」相当の表現の有無や語形を記録しているかは調査員によりばらつきがある。そのため、『新日本言語地図』からは、「もう少しで」相当の表現の必要性を示すことはできない。

5　「(危なく）シタ」形式を使用すると回答したインフォーマントについては、言語形成期において外住歴が多いこともあり、今後さらなる調査が必要になる。また、使用する場合には「丁寧、よそよそしい」といった内省を伴っており、第一回答ではいずれも「スルトコロダッタ（オズットコダッタなど)」が回答された。本データは、誘導によって得られたものである。この点からも、さらなる調査の必要性がある。

文　献

金田章宏（1983)「東北方言の動詞のテンス―山形県南陽市―」『琉球方言と周辺のことば』千葉大学教養学部総合科目運営委員会

工藤真由美編（2001)『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』文部省科学研究費成果報告書 2　大阪大学文学研究科

国立国語研究所編（1998)『方言文法全国地図　第 4 集』大蔵省印刷局

渋谷勝己（1999)「文末詞「ケ」―三つの体系における対照研究―」『近代語研究』10 武蔵野書院

竹田晃子（2012)「テンス・アスペクト」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室

津田智史（2011)「テンス形式「－カッタ」」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

津田智史 (2014)「方言アスペクトを再考する―山口市方言のヨル・トルの表す意味―」『地域言語』22

津田智史（2016）「107.＜もう少しで＞落ちるところだった（将然相・回想）」大西拓一郎編『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』朝倉書店
東北大学方言研究センター編（2016）『生活を伝える被災地方言会話集 3―宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話―』東北大学方言研究センター
東北大学方言研究センター編（2017）『生活を伝える被災地方言会話集 4―宮城県気仙沼市・名取市の 100 場面会話―』東北大学方言研究センター
本多　啓（2000）「方言文法と英文法(1)―宇和島方言の進行形をめぐって―」『駿河台大学論叢』20

付　記

本稿は被災地方言会話集の分析・研究発表会「方言学の沃野 ―談話資料から見える世界―」でおこなった口頭発表の内容を修正したものである。発表に際し、ご意見・ご助言をくださった方に記して感謝申し上げる。

待遇の文末形式「(ラ)イン」

八　巻　千　穂

1　はじめに

宮城県方言には、敬語表現として文末形式「(ラ)イン」が挙げられる。この表現は加藤・小林・佐藤(1982)において「書かイン」や「見ライン」のように、動詞の未然形に接続し、共通語では「書きなさい」、「見なさい」といった意味に該当し、丁寧な勧誘、命令表現とされている。実際に同じ宮城県内の仙台、石巻での使用が見られるだけでなく、気仙沼での使用も確認されている。また、「(ラ)イン」単独の形式ではなく、下一段活用動詞「ける」に「ライン」が接続した「ケライン」は「テケライン」の形で動詞に接続する付属形式である。これは「依頼」「勧め」の 2 つの意味のみを持つ形式であり、「(ラ)イン」がかかわる重要な表現であることから、本報告で取り上げることとする。これまでの研究において「(ラ)イン」、「テケライン」は丁寧な勧誘、命令表現とはされているものの、詳細な意味の記述は行われておらず、また、その丁寧度も不明である。

気仙沼市近辺の岩手県気仙地方(現在の行政区分でいう大船渡市、陸前高田市、気仙郡住田町、旧唐丹町)で話されているケセン語について記した山浦(1986)には、この「(ラ)イン」は「なれなれしい、うちとけた間柄でやや丁寧に命令する形」とされており、またその一方で「隣の宮城県ではこの形が十分丁寧な形」ともされており、どの程度の丁寧さを持つのかが不明確である。

本稿は、気仙沼市において、**①勧誘、命令、依頼などの行為指示表現の中で「(ラ)イン」がどの場合に用いられているのか、②他に存在する勧誘、命令、依頼表現に比べてどの程度丁寧な表現と言えるのか**、という 2 点について調査を行ったものである。

なお、本報告は特に断らない限り、高年層の話者 3 名の面接調査の結果に寄ったものである。3 名の話者については、昭和 17 年生まれの女性〔昭 17 女〕、昭和 31 年生まれの女性〔昭 31 女〕、昭和 32 年生まれの男性〔昭 32 男〕である。

2　調査項目とその意図

本節では調査の概要について詳しく述べる。今回の調査では文末形式「(ラ)イン」を使った形式が他の行為指示表現に比べてどの程度の丁寧さを持つのかを検討するため、調査項目を設定する際に以下のような観点を設けた。

(1) 行為指示表現の中のどの表現に「(ラ)イン」を用いるか

(2)「(ラ)イン」をどのような人間に対して用いることが可能か

本節ではこれらの観点の基準をどのように設定したのかについて記述していく。

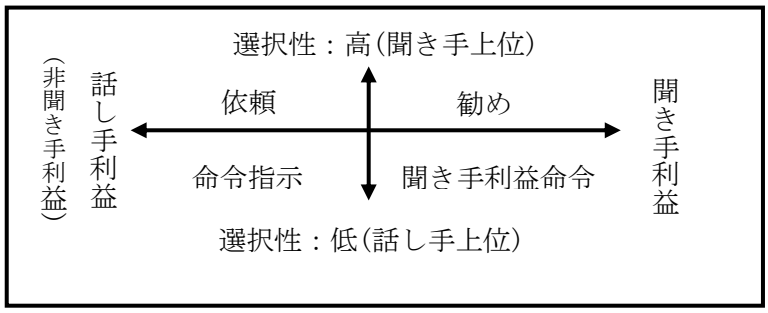
(1)行為指示表現の分類

今回、「(ラ)イン」の意味を分類する基準として用いたものは、森(2016)において挙げられている「行為指示表現の分類」である。行為指示表現とは、聞き手に何らかの命令、依頼といった行為の指示をすることである。

この行為指示表現には話し手に利益があるのか、聞き手に利益があるのかという軸(受益者)と、話し手がどれだけその行為を遂行したく、どれだけ強制力があるのか(選択性)という軸で、「依頼」、「命令指示」、「勧め」、「聞き手利益命令」の4つに分類している。

「(ラ)イン」はこれまでの研究において丁寧な勧誘、命令表現とされていたが、本発表ではこの4つの分類をもとに質問文を作成し、調査票を作成した。

図 1　行為指示表現の分類　森(2016)



(2)対話相手の設定

行為の指示をする上で、話し手と聞き手の関係性というものは非常に重要である。森(2016)においても、「恒常的であれ、臨時的であれ、話し手と聞き手の上下関係は選択性を考慮する上で重要である」とあるため、今回は(ⅰ)仕事での上下関係、(ⅱ)家族間の上下関係という基準を設けた。(ⅰ)と(ⅱ)との間には親疎関係の差もあるため、(ⅰ)の、目上の関係の方がより丁寧な表現を用いると想定される。

以下が対話相手として実際に想定しているものである。

仕事関係：上司、同期、部下
家族：親、配偶者、子

以上の(1)、(2)を組み合わせ、質問を作成した。例えば親を対話相手とした場合、「勧め」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「命令指示」のそれぞれに対してどのような言い方をするのかを聞き、初めに回答された形式だけではなく、「(ラ)イン」や「テケライン」、動詞の命令形を使うかどうかを質問した。また、「使う」と回答を得た形式を、丁寧だと思う順に並べてもらい、「(ラ)イン」の丁寧度をはかった。

3　調査結果

以下、「勧め」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「命令指示」の順に、調査結果をまとめる。今回の調査では設定していた項目を調査内ですべて聞くことがかなわなかったため、本稿では自分自身の親、配偶者、子、そして仕事上の上司の場合についてのみ取り上げる。

3.1　勧め

「勧め」の場面については、質問文を「コンサートのチケットが手に入ったものの、自分は行くことができなくなりました。〔対話相手〕に、チケットを譲るので行くように勧めるとき、どのようにおっしゃいますか」というものに設定した。対話相手によって、上の質問文の「コンサートのチケット」のほかに「温泉旅行の券」や「映画のチケット」と適宜変更した。表 1・表 2 は調査結果をまとめたものである。表中の記号については〇が「使用する」、×は「使用しない」、カッコ内の数字は、同じ場面で回答された他の形式も含めて丁寧だと思う順に並べた際の順位である。

表 1　女性における「勧め」

相手＼形式	イカイン〔昭 17 女〕	イカイン〔昭 31 女〕	イッテケライン〔昭 17 女〕	イッテケライン〔昭 31 女〕
上司	×	×	×	×
親	×	×	×	×
配偶者	〇(3)	〇(2)	〇(2)	×
子	〇(2)	〇(2)	×	×

〔昭 17 女〕は上司や親に対しては「(ラ)イン」「テケライン」は使用しないとの結果となり、「イガネスカ」「イッテミネスカ」といった疑問の形で尋ねるとの回答が得られた。配偶者に対しては「(ラ)イン」を用いることができるが、「イッテケンネスカ」が一番丁寧だとの回答であり、勧めるというよりも、まずは伺いを立てるということだった。子に対しては「イッテダイ」が最も丁寧な言い方であるとしている。「イッテダイ」は共通語では「行ってらっしゃい」に該当する表現であるが、動詞に「イン」が接続したものと考えるには動詞が特定しがたく、定型化した言い方と考えられるため、今回の考察からは除くこととする。次いで丁寧なのが「イカイン」であるという結果になった。しかし、子供でも男女間で違いがあるとしており、「イカイン」は女の子供にのみ用いられるとしている。これらのことから、文末形式「(ラ)イン」は、同等もしくは目下の人物に用いる言い方であり、特に同性に用いやすい表現なのではないかと考えられる。

〔昭 31 女〕も〔昭 17 女〕同様、上司、親に対しては「イン」「テケライン」の使用は見られず、「イッテミネスカ」、「イッテダイン」を用いるとのことであった。配偶者に対しては「(ラ)イン」を用いることが可能ではあるが、「イッテダイ」が最も丁寧である、としている。子に対しても配偶者と同様だが、「イケ」という命令形が使用可能だとしている。子に対してはよりぞんざいな言い方

が用いられやすいということだろう。

表 2　男性における「勧め」

相手＼形式	イカイン	イッテケライン
上司	×	×
親	○(2)	×
配偶者	○	×
子	NR	NR

〔昭 32 男〕は上司に対しては「イカイン」、「イッテケライン」の両形式ともに用いない結果となった。「イッテミマセンカ」、「イカナイデスカ」、「イッテクダサイ」といった共通語形式の丁寧な表現が回答されており、方言と共通語形式を使い分けていることがうかがえる。親が対話相手の場合は「イッタラ　ドー」と伺いを立てる形式が最も丁寧としており、次いで「イカイン」が回答され、次いで「イケヤ」となり、動詞の命令形より「イカイン」は丁寧だと考えられる。配偶者に対しては「イカイン」のほかに「イカナイカ」と伺いを立てる形式や、「イッテコイ」といった形式も回答されている。しかしながらその丁寧の順については詳しい回答が得られなかったため、不明である。子に対する場合については回答が得られなかった。

3.2　聞き手利益命令

「聞き手利益命令」の場面での質問文は「〔対話相手〕が出かける時間になったのに、いつまでも出発しないので、早く行くように言うときに、何とおっしゃいますか」と設定した。結果は以下の表 3・表 4 にまとめる。

表 3　女性における「聞き手利益命令」

相手＼形式	イカイン〔昭 17 女〕	イカイン〔昭 31 女〕	イッテケライン〔昭 17 女〕	イッテケライン〔昭 31 女〕
上司	×	×	×	×
親	×	○(2)	×	×
配偶者	○(2)	○(2)	○(1)	×
子	○	○(1)	×	×

〔昭 17 女〕は上司に対しては「イン」や「テケライン」は用いないとの回答であり、「イカレタホーガ　イーデス」と促す言い方になるとのことだった。親に対しても「勧め」の場合と同様、「(ラ)イン」「テケライン」は使用しないとの結果となり、「ジカン　ダイジョーブナノ」、「ナンジダッケ」のように時間をたずねて促すようにする、との回答であった。一方配偶者に対しては「イッテケラ

イン」、「イカイン」の使用が見られた。子に対しては「イカイン」のみの使用できるとの回答であった。「勧め」の場合に近い結果となっているものの、「聞き手利益命令」の場合は子に対して男女間で差異があるとは聞かれなかったため、聞き手利益命令の場合は「イン」を用いる傾向が強いことが考えられる。

〔昭 31 女〕も上司に対して「(ラ)イン」は全く用いない結果となった。また、親に対して「イカイン」の使用はできるが、〔昭 17 女〕同様、まずは「イカナクテイーノ」と伺いを立てる言い方が最も丁寧だとの回答が得られた。これは配偶者に対しても同様である。子に対しては「勧め」の場合と同じく、命令形の「イケ」を使用可能であるとの回答であった。

表 4　男性における「聞き手利益命令」

相手＼形式	イカイン	イッテケライン
上司	×	×
親	○(2)	×
配偶者	○(1)	×
子	NR	NR

〔昭 32 男〕は上司が対話相手の場合、方言形を用いることはなく、「ジュンビシテクダサイ」や「イッテクダサイ」と共通語形を用いるとの回答であった。また、親に対しては最も丁寧なものが「イカナイノ」であるが、次いで「イカイン」が用いられると回答が得られた。〔昭 31 女〕とおおよそ似た回答となっているが、配偶者に対しては「イカイン」が最も丁寧であり、動詞の命令形の「イケ」が次いで回答されており、親と配偶者間では〔昭 31 女〕と異なった回答となっていることから、男女間で差異があるのではないかと考えられる。

3.3　「依頼」

「依頼」の場合の質問文は「用事ができたため、自分が行く予定だった町内会の会議に行くことができなくなってしまいました。〔対話相手〕に代わりに行ってもらうようにお願いするときに、何とおっしゃいますか。」と設定した。なお、対話相手によって、下の質問文の「町内会の会議」の部分を、「会議」と適宜変更した。以下、結果を表 5・表 6 にまとめる。

〔昭 17 女〕は上司に対してはやはり「イン」は一切用いない結果となり、また親に対して依頼する場合、「イッテケライン」が使用できるが、「イッテケンネスカ」と伺いを立てる言い方が最も丁寧だとの回答だった。これは配偶者、子に対しても同様である。しかし、女の子には「イカイン」も使えるかもしれないとのことであった。また、「イッテケダラ イッチャー」という言い方も見られたが、丁寧度について詳しく尋ねることはできなかった。

表 5　女性における「依頼」

相手＼形式	イカイン〔昭 17 女〕	イカイン〔昭 31 女〕	イッテケライン〔昭 17 女〕	イッテケライン〔昭 31 女〕
上司	×	×	×	×
親	×	×	○(2)	○(1)
配偶者	×	×	○(2)	○(2)
子	×	×	○(2)	○(1)

〔昭 31 女〕は上司に対しては「イン」だけでなく、「イッテクダサイ」という共通語形式も用いない結果となっている。これは、より丁寧な言い方で依頼しなければならないため、「イッテイタダケナイデショーカ」が回答されている。親、配偶者、子に対しては「イッテケライン」「イッテケロ」が使用できるとの回答であった。ただし、配偶者に対しては「イッテケンネベカ」が最も丁寧な言い方だとしている。家族間でも、親しさの度合いがあり、言葉の用い方に差異が出ているのだと考えられる。

表 6　男性における「依頼」

相手＼形式	イカイン	イッテケライン
上司	×	×
親	×	×
配偶者	×	○(1)
子	NR	NR

〔昭 32 男〕は上司に対してこのような依頼ができないため回答が得られなかった。親に対しては「イッテケンネガ」、「イッテケロ」が回答されており、女性同様伺いを立てる形式が最も丁寧とされている。配偶者に対しては「イッテケライン」が最も丁寧、次いで「イッテケネガ」、「イッテケロ」の順である。親に対する回答と異なっていることから、女性同様、家族間での言葉の用い方に差異が出ているのだと考えられる。

3.4　「命令指示」

「命令指示」については、質問文は「危険な作業をしていて手が離せないときに、〔対話相手〕に話しかけられました。危ないので向こうに行くように言うとき、何とおっしゃいますか」と設定した。質問文中の危険な作業については、「梯子を用いての高所の作業」や「鎌を使っての除草作業」などと適宜補足を行った。以下、表 7・表 8 は結果をまとめたものである。

表 7　F1における「命令指示」

相手＼形式	イカイン〔昭 17 女〕	イカイン〔昭 31 女〕	イッテケライン〔昭 17 女〕	イッテケライン〔昭 31 女〕
上司	×	×	×	×
親	○(3)	○(2)	○(2)	×
配偶者	○(2)	○(4)	×	○(1)
子	○(3)	○(1)	×	×

〔昭 17 女〕は「親に向かって強く命令ができない」とのことで、親に対しては命令でも「イッテケライン」「イッテテケライン」の回答が見られた。配偶者に対しては「イッテライ」が最も丁寧であり、子に対しては「イッテライ」、「イッテロー」の順で丁寧であり、「イカイン」はかなり強い言い方になるとの回答であった。なお、「イッテライ」は「行っていなさい」の意の「イッテイライ」の変化と考えられる。

〔昭 31 女〕は上司以外に対しては「イカイン」が用いられるとの回答になった。親に対して「イッテテ」が最も丁寧な形であり、配偶者へは「イッテテ」を三番目に丁寧な言い方だとしている。また、子に対しては三番目に「イッテテ」を挙げており、「イッテテ」については回答に混乱が見られる。また、親、配偶者、子に対して動詞の命令形が使用できるとの回答があり、「イカイン」の方が丁寧だとしている。

表 8　男性における「命令指示」

相手＼形式	イカイン	イッテケライン
上司	×	×
親	×	×
配偶者	○(1)	×
子	NR	NR

上司に対しては共通語形の「イッテテクダサイ」が回答され、方言形は用いない結果となった。親の場合、動詞の命令形「イケ」のみの回答、配偶者に対しては「イカイン」が最も丁寧で「イケ」が次いで回答された。女性の場合は動詞の命令形や「イカイン」以外にも多数の形式の回答が見られたが、男性は丁寧さよりも直接的に伝える表現を用いる傾向にあるのではないだろうか。

3.5　調査結果のまとめ

前節まで、各意味ごとに結果をまとめたが、ここではすべての意味について取り上げ、結果を表 9～表 11 にまとめた。その際、「勧め」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「命令指示」を、丁寧に言わなければならないであろう順に並び替え、左から「依頼」、「勧め」、「聞き手利益命令」、「命令指示」

として表を作成している。また、「(ラ)イン」の丁寧さがどの程度の位置にあるのかを検討するため、回答された形式全体を、話者に丁寧だと思う順に並べてもらった順番に従って提示する。なお、「(ラ)イン」が用いられている表現には囲いを、「テケライン」が用いられている表現には下線を引いている。

〔昭 17 女〕において、上司に対してはやはり共通語と同じ表現が用いられており、家族に対しては方言形が多く用いられていることから、高年層においても対話相手によって共通語と方言の使い分けをしていることが伺える。また、どの意味においても「イッテケライン」が用いられていることには注意をしなければならない。明確に「勧め」、「聞き手利益命令」、「依頼」、「命令指示」のように意味を分類して用いているのではなく、「丁寧に指示する表現」として「テケライン」を用いているのではないだろうか。しかしながら、「勧め」、「聞き手利益命令」では配偶者、子にのみに対して用いられていること、また、「イッテケライン」よりも伺いを立てるような言い方が上位にされていることから、「テケライン」「(ラ)イン」の順で丁寧な表現であり、また、同等もしくは目下にのみ用いることが可能な表現であると考えられる。

表 9　〔昭 17 女〕における丁寧度順

	依頼	勧め	聞き手利益命令	命令指示
上司	NR	イッテモラエマセンカ イッテモラウトアリガタイデス	イカレタホーガイイデス	コナイデクダサイ キテワイケマセン
親	イッテケンネスカ イッテケライン	イガネスカ イッテミネスカ	ジカンダイジョーブ ナンジダッケ	イッテテケライン イッテケライン イカイン
配偶者	イッテケンネスカ イッテケライン	イッテケンネスカ イッテケライン イカイン	イッテケライン イカイン	イッテライ イカイン
子	イッテケンネスカ イッテケライン	イッテダイ イカイン	イカイン	イッテライ イッテロー イカイン

〔昭 31 女〕も〔昭 17 女〕同様、対話相手によって共通語と方言の使い分けをしていることが伺える。また、「依頼」では「イッテケライン」が、その他では「イカイン」というように意味で分けられていることに注目したい。加えて、〔昭 17 女〕同様「イカイン」よりも伺いを立てる言い方が丁寧だとされているものの、子に対しては動詞の命令形が多く用いられており、対話相手が目下の人間の場合、「イカイン」が丁寧な表現として扱われているのではないだろうか。

女性 2 名の調査結果を比較してみると、〔昭 17 女〕、〔昭 31 女〕で共通しているのは「(ラ)イン」

が同等、もしくは目下に用いることが多い、という点である。また、伺いを立てる言い方に比べるとややぞんざいな表現である、という点が共通して言えることであろう。しかし、「テケライン」の場合結果が大きく異なり、気仙沼市市内での地域差、また年齢差、職業による差といった要因も考えられるが、対象人数が少なかったことから一概にその結論を言うことはできない。

表 10　〔昭 31 女〕における丁寧度順

	依頼	勧め	聞き手利益命令	命令指示
上司	イッテイタダケナイデショーカ	イキマセンカ	イカナクテイインデスカ	イッテテクダサイ
親	イッテケライン イッテケロ イッテクダサイ	イッテミネスカ イッテダイン	イカナクテイーノ イカイン	イッテテ イカイン イケ
配偶者	イッテケンネベカ イッテケライン イッテケロ	イッテダイ イカイン	イカナクテイーノ イカイン	イッテケライン イッテケロ イッテテ イカイン イケ
子	イッテケライン イッテケロ	イッテダイ イカイン イケ	イカイン イケ	イカイン イッテケロ イッテテ イケ

男性の場合、上司への回答は女性と同様、共通語形式を用いる結果となっており、方言形と共通語形との使い分けが見られる。親、配偶者という自らの家族に対しては、「勧め」、「聞き手利益命令」、「命令指示」において「イカイン」が用いられており、〔昭 31 女〕の回答とおおよそ似た結果となっている。また、「依頼」の場合、「イッテケロ」という形式が見られる。これは「テケル」の命令形であり、やはり「イン」が接続した「テケライン」の方が丁寧だということがうかがえる。この「テケロ」は女性ではあまり回答が見られず、依頼とはいえ命令形であることが使用が避けられた要因であろうか。

注目すべき点は、〔昭 32 男〕は「命令指示」において対話相手が親の場合、動詞の命令形「イケ」のみを回答している点である。配偶者に対しては「イカイン」が「イケ」よりも丁寧だと回答されており、丁寧な表現を用いようとしていることがうかがえる。家族間では目上の存在である親よりも配偶者の方が配慮される存在として扱われていることがうかがえ、男女間での差異と言えるのではないだろうか。

3 名の結果を比較すると、共通点は上司へは共通語形式が用いられる点であり、方言形と共通語

形が使い分けられている点であろう。〔昭 17 女〕と〔昭 31 女〕、〔昭 32 男〕間では年代差があるが、この点においては非常に似通っているといえる。「イカイン」のみに注目すると〔昭 17 女〕は「勧め」「聞き手利益命令」では親には用いることができず、配偶者と子にのみ使用できるとの回答だが、〔昭 31 女〕では「聞き手利益命令」「命令指示」で親に使用でき、〔昭 32 男〕は「勧め」、「聞き手利益命令」で親に対して使用できると回答している。年代が下がるにつれて「イカイン」の丁寧度が上がり、家族間では目上の存在である親にも使用できるようになっている可能性がある。また、〔昭 32 男〕では「テケライン」の回答があまり見られず、「テケロ」の回答が多く見られた。先にも述べたが、この「テケロ」は女性ではあまり回答が見られなかったことは、依頼とはいえ命令形であることに原因があるのかもしれない。

表 11　〔昭 32 男〕における丁寧度順

	依頼	勧め	聞き手利益命令	命令指示
上司	×	イッテミマセンカ イカナイデスカ イッテクダサイ (順位不明)	ジュンビシテクダサイ イッテクダサイ (順位不明)	イッテテクダサイ
親	イッテケンネガ イッテケロ	イッタラドー イカイン イケヤ	イカナイノ イカイン	イケ
配偶者	イッテケライン イッテケネガ イッテケロ	イカナイカ イカイン イッテコイ	イカイン イケ	イカイン イケ
子	NR	NR	NR	NR

4　まとめ

以上、実際の調査の結果をもとに、文末形式「(ラ)イン」のもつ丁寧度について他の表現と比較・検討を行ったが、①勧誘、命令、依頼などの行為指示表現の中で「(ラ)イン」がどの場合に用いられているのか、②他に存在する勧誘、命令、依頼表現に比べてどの程度丁寧な表現と言えるのか、という 1 節でたてた問いについてまとめる。

①「(ラ)イン」は「勧め」、「聞き手利益命令」、「命令指示」の場合に用いられている。「テケライン」は「依頼」が中心だが、丁寧に指示する際は「依頼」以外にも用いることができる可能性がある。

②「(ラ)イン」は動詞の命令形と比べると丁寧な表現と言えるが、伺いを立てる言い方よりもぞんざいな表現である。また、使用できる相手は女性の場合、自分と同等の立場、もしくは目下に限られている。ただし年代が下がるにつれて丁寧度が上がり、家族間では目上である

親にも用いることが可能になっている。

今後の課題として、調査結果で「テケライン」の使用場面に大きく差が出た点があり、また対象人数が少ないことから、再度調査を行い、さらなる検討が必要である。また、質問文によっては話者がこちらの想定していることとは異なった回答をすることがあったため、質問文についても検討しなおし、更に詳しく考察を進めていきたい。

文　献

加藤正信・小林隆・佐藤和之(1982)「宮城県北の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告』別巻19

瀧川美穂(1998)「待遇表現」加藤正信・遠藤仁編『宮城県中新田町方言の研究』科学研究費研究成果報告書

森勇太(2016)『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房

山浦玄嗣(1986)『ケセン語入門』共和印刷企画センター

接尾辞「ラヘン」

佐　藤　亜　実

1　調査の目的

接尾辞「ラヘン」とは、「～あたり」と類似の意味をもち、「そこラヘン」「関西ラヘン」のような形式で使用される。ラヘンを使用した表現には、「そこラヘン」「どこラヘン」等の指示詞＋ラヘンの形式と「関西ラヘン」「11 時ラヘン」等の一般的な名詞＋ラヘンの形式がみられ、これらの間には関連性が指摘できる。すなわち、元は「そこら＋へん」という構成であったものが「そこ＋ラヘン」と捉えられる異分析が起こり、切り出された「ラヘン」の適用範囲が広がることで、「関西」「11 時」のような名詞にも使用できる接尾辞ラヘンが成立したと考えられる。

また、「そこラヘン」「どこラヘン」などの形式は一部の国語辞典にも記載されていることから、少なくとも指示詞＋ラヘンは、現在共通語的に使用されうる語彙として認識されていると言える。しかし、全国 72 地点における 1974（昭和 49）年から 1988（昭和 63）年にかけての調査結果をまとめた『現代日本語方言大辞典』の「ここら」「そこら」「あそこら」「どこら」の項目において、指示詞＋ラヘンで回答する地域としない地域があることから、もともと指示詞＋ラヘンの使用には地域差があったと考えられる。また、それをもとに発生した名詞＋ラヘンの使用にも地域差があることがこれまでの調査からわかっている。

本報告では、宮城県気仙沼市での調査の結果をもとに、接尾辞「ラヘン」の用法を記述する。具体的には、これまで佐藤（2014）等で明らかにした名詞＋ラヘンの用法と照らし合わせながら、気仙沼市において使用される名詞＋ラヘンの用法について明らかにする。なお、接尾辞「ラヘン」は近年生じた表現であり、指示詞＋ラヘンは 1950～1970 年代に急速に関東・中部・近畿地方から全国に広まったこと、名詞＋ラヘンはその後を追うように広まりつつあることがわかっている（佐藤 2016a）。ラヘンの使用先行地域、特に近畿地方では、高年層による名詞＋ラヘンの使用もみられるが、その他の地域では、ラヘンを使用するのは主に若い世代である。本報告の調査地域である宮城県は、『現代日本語方言大辞典』で指示詞＋ラヘンの使用がみられず[注 1]、名詞＋ラヘンの出現も佐藤（2016a）で指摘したラヘンの先行使用地域より遅れている地域である。このことから、宮城県気仙沼市で接尾辞「ラヘン」を使用するのは若い世代が中心であることが予想できたため、調査では若年層話者 2 名〔20 代男〕〔30 代女〕と高年層話者〔60 代男〕と主に若年層を対象とした。結果として、〔20 代男〕は名詞＋ラヘンを用いると回答したが、〔30 代女〕は使用しないが聞くことはあるという回答がほとんどであり、〔60 代男〕は使用することはなく聞いたこともないという回答であった。したがって、本報告では特に断りのない場合、主に〔20 代男〕の回答を用いて記述する。ただし、年代による使用差に言及する場合もある。

2　調査項目

本報告では、これまでの調査で明らかにした名詞＋ラヘンの用法を援用し、宮城県気仙沼市において使用されるラヘンの用法を記述する。佐藤（2014）では、福島県郡山市の若年層を対象とした記述調査により、ラヘンには以下の用法があることを指摘した。

①接尾辞ラヘンには、「場所」「時間」「数量」「人」「事物」といった様々な意味を有する名詞が上接する。

②接尾辞ラヘンの示す意味としてはａとｂが存在する。

ａ　ラヘンによってある範囲を漠然と示す用法

ⅰ　上接語の表すものの周辺を漠然と示す

ⅱ　上接語の表すものの範囲を漠然と示す

ｂ　ラヘンによって他の候補を暗示する用法

他に存在する候補を暗示しつつ、上接語を候補の中の代表として示す

佐藤（2014）の調査地域と本報告の調査地域とは異なるが、佐藤（2014）で指摘した用法は国会会議録や全国の地方議会会議録でもみられ（佐藤 2016b）、またこれまで宮城県で実施した予備調査でも使用するとの回答がある。このことから、宮城県気仙沼市でも佐藤（2014）と同様の用法が使用される可能性が高いと考え、上記の用法をもとに調査項目を設定した。

調査にあたっては、①で示した上接語と②で示したａとｂの用法を組み合わせて項目を作成し、「よく使う／たまに使う／使わないが聞くことはある／使わないし聞いたこともない」の 4 つの選択肢から 1 つを選ぶ択一方式で行った。次節以降、まずはａの漠然用法、次にｂの暗示用法の使用について述べる。記述にあたっては、話者が「よく使う」「たまに使う」とした項目を主に提示する。

3　接尾辞「ラヘン」の用法

3.1　ラヘンによってある範囲を漠然と示す用法

3.1.1　場所を表す名詞＋ラヘン

場所を表す名詞にラヘンが後接する場合（場所を表す名詞＋ラヘン）については、佐藤（2014）の「名詞の表す範囲が狭い場合は《周辺》用法が、名詞の表す範囲が広い場合は《範囲》用法が使用されやすい」という指摘を踏まえ、狭い範囲を表す名詞として「イオン（食料品店の名称）」、広い範囲を表す名詞として「関西」を設定した。すなわち、「イオンラヘン」の場合はａ-ⅰ上接語の表すものの周辺を漠然と示す用法（《周辺》用法）が、「関西ラヘン」の場合はａ-ⅱ上接語の表すものの範囲を漠然と示す用法（《範囲》用法）が使用されると予想した。実際に「使う」と回答したのは以下の 4 項目である。回答はすべて「たまに使う」というものであった。

(1)〈太郎の家が**イオン（店名）の周辺**にある場合〉太郎の家はイオン（店名）ラヘンにある。

(2)〈**イオンの周辺**に行く場合〉イオン（店名）ラヘンに行く。

(3)〈太郎の家が岡山県、愛知県、福井県など、**関西の周辺（関西は含まない）**にある場合〉関西ラヘンにある。

(4)〈岡山県、愛知県、福井県など、**関西の周辺**にある県を旅行する場合〉関西ラヘンに行く。

結果として、「イオンラヘン」「関西ラヘン」ともにａ-ｉ《周辺》用法が使用されることがわかった。「イオンラヘン」については予想と同じ結果であるが、「関西ラヘン」については予想とは異なり、広い範囲を表す名詞であるにもかかわらずａ-ⅱ《範囲》用法の使用はみられなかった。「関西」よりも広い範囲を表す名詞を提示すればａ-ⅱ《範囲》用法が使用される可能性もあるが、少なくともａ-ⅱ《範囲》用法よりａ-ｉ《周辺》用法の方が使用されやすいということは指摘できそうである。

なお、〔30 代女〕の話者は、「イオンラヘン」のａ-ｉ《周辺》用法のみ、使わないが聞くことはあるという回答であった。その上で、「「市役所ラヘン」「郵便局ラヘン」という形式で、周辺を示す場合であれば使えるかもしれない」と指摘した。このような上接語の違いには、単語の拍数や語末の音素といった形態面が関わっている可能性もあるが、郊外にあることが多く、店舗と駐車場という広い敷地を有するショッピングモールと、街中にあり、1～3 階程度の小さな建物であることが多い市役所や郵便局、という意味面が関わっている可能性もある。意味面の違いである場合、「イオン」よりも「市役所」「郵便局」の方が使用しやすいという指摘には、ラヘンにはより狭い範囲を表す名詞が上接しやすい、ということが反映されていると考えられるが、これについてはさらなる検討が必要である。

3.1.2　時間を表す名詞＋ラヘン

時間を表す名詞にラヘンが後接する場合（時間を表す名詞＋ラヘン）についても、「11 時」を狭い範囲を表す名詞、「春」を広い範囲を表す名詞として用い、《周辺》と《範囲》の用法の使用があるかを確認した。話者が使用するとしたのは以下の 2 項目であり、またすべて「たまに使う」との回答であった。

(5)〈**冬あるいは夏（春は含まない）の時期**に旅行に行く場合〉春ラヘンに行く。

(6)〈**春の間のどこかの時期**に旅行に行く場合〉春ラヘンに行く。

（5）のａ-ｉ《周辺》用法、（6）のａ-ⅱ《範囲》用法のどちらの用法も使用がみられたが、使用するのは「春ラヘン」のみであり、「11 時ラヘン」は使用しないとのことであった。気仙沼市では、場所を表す名詞＋ラヘンのみならず時間を表す名詞＋ラヘンも使用できるが、時間を表す名詞ラヘンの場合、場所を表す名詞＋ラヘンよりも使用（許容）できる名詞の種類が少ないと考えられる。また、福島県郡山市におけるこれまでの調査では、名詞自体の表す範囲が狭く、周辺を表しやすい

（《周辺》用法を取りやすい）名詞が使用されることが多かった。すなわち、「11 時」という狭い範囲を表す名詞の方が、「春」という広い範囲を表す名詞よりもよく使用され、「11 時前後」という意味で「11 時ラヘン」を使う、という回答がよく聞かれた。しかしながら、今回の気仙沼市の話者においては、そのような傾向がみられなかった。このことから、福島県郡山市と気仙沼市では使用しやすい用法や上接語が異なるとも考えられるが、話者の個人差である可能性も否めないため、今後話者や名詞の数を増やして確認する必要がある。

3.1.3　数量を表す名詞＋ラヘン

数量を表す名詞にラヘンが後接する場合（数量を表す名詞＋ラヘン）として、「30 歳」という年齢、「3 番目」という順序を表す名詞を用いて《周辺》用法と《範囲》用法の使用を尋ねた。これらは「11 時」のような時間を表す名詞と類似した性質をもつ。「30 歳」と「3 番目」は、「29 歳、30 歳、31 歳…」、「2 番目、3 番目、4 番目…」のように両者とも周辺として連続的な範囲を想定できる名詞であり、また「30 歳」「3 番目」ともに広い範囲を表す名詞とは言えないため、《周辺》の用法が使用されると予想した。話者は（7）のみ「たまに使う」とのことだった。

(7)〈太郎の年齢が **30 歳前後**である場合〉太郎の年齢は <u>30 歳ラヘン</u>だ。

数量を表す名詞＋ラヘンの中では、「30 歳ラヘン」の《周辺》用法の使用はなされることがわかった。先の 3.1.2 節に示した時間を表す名詞＋ラヘンで使用があった名詞が「春」だったことを踏まえると、気仙沼市では「春」「30 歳」といった年月に関わる名詞が使用されやすい可能性がある。これについても今後の検討が必要である。

3.1.4　人・事物を表す名詞＋ラヘン

これまでみてきた名詞は、いずれも周辺や内部に連続的な範囲を想定できる名詞であった。すなわち、「イオンラヘン」であればイオンの地理的な周辺、「関西ラヘン」であれば関西地方といった地理的な範囲を想定できる、ということである。つまり、《周辺》用法と《範囲》用法の両者とも、ラヘンに上接する名詞と連続的な範囲を表すことができる。

一方で、本節で確認する「歌手」「クラシック」「中華（中華料理）」は、上接する名詞の周辺や内部に連続的な範囲を想定できない名詞である。これまでみてきた名詞＋ラヘンと同様に《周辺》用法と《範囲》用法は存在するが、他の名詞＋ラヘンとは範囲の示し方が異なる点がある。まず、人・事物を示す名詞＋ラヘンの《範囲》用法について説明する。《範囲》用法の場合、上接する名詞の内部に範囲を指摘することは可能であるが、その範囲は連続的なものではない。例えば、「歌手ラヘン」の場合、範囲として想定できるのは「演歌、J-pop、ジャズなど、音楽のジャンル別の様々な歌手」である。想定できる範囲はそれぞれ独立的な候補であり、他の名詞＋ラヘンのように空間や時間の連続的な範囲を認めることは困難である。なお、今回の調査では「（太郎の将来の夢が歌手である場

合）太郎の将来の夢は歌手ラヘンだ」「（太郎の趣味がクラシックン学全般を聴くことである場合）太郎はクラシックラヘンを聴く」「（近くにある定食屋が中華料理全般を出す店である場合）あの店では中華ラヘンを出す」という文の使用を尋ねた。

人・事物を表す名詞＋ラヘンの《周辺》用法は、周辺として表す範囲の性質が変化してしまう点で他の名詞＋ラヘンと異なる。例を挙げると、「（太郎の近くに消しゴムが落ちている場合）消しゴムは太郎ラヘンにある」、「（椅子の近くに消しゴムが落ちている場合）消しゴムは椅子ラヘンにある」のような使い方は可能ではあるが、意味としては「太郎の近く」「椅子の近く」といった場所的な周辺を示すものになるのである。つまり、《周辺》用法として使用される場合には、「上接する人・事物の周辺にあるジャンル・性質的な範囲」ではなく「上接する人・事物が存在する場所の周辺にある空間的な範囲」の意味を有し、場所を表す名詞＋ラヘンと同じ性質のものになる。

話者が使用するとしたのは以下の 1 項目のみであった。「たまに使う」との回答である。

(8)〈太郎の趣味が**クラシック音楽全般**を聴くことである場合〉
　　太郎はクラシックラヘンを聴く。

ただし、話者曰くこの場合の「クラシックラヘン」は「静かな音楽」を示しうるとのことであった。したがって、「クラシック音楽全般」の他にも、「クラシック音楽ではないが静かな雰囲気の音楽」も含まれることが考えられる。そうであれば、次節に示すｂの《暗示》用法にあたる用例であるとも言えるが、具体的に「クラシック以外の候補」を提示することは難しい、との話者からの回答を踏まえ、ここではａ-ⅱの《範囲》用法の例として扱っておく。

3.2　ラヘンによって他の候補を暗示する用法

本節では《暗示》用法の使用をみていきたい。《暗示》用法とは、ラヘンを付けることによって上接する名詞以外の候補も存在することを表し、あたかも上接する名詞を際立たせるような意味を有するものである。例えば、「イオン」という名詞が上接した項目では、「（市内の食料品店はいくつかあるが、その中でも特にイオンは品揃えがいいので、イオンで買うことを勧める場合）食料品を買うならイオンラヘンがいい」という例文を作成した。この場合、「イオンラヘン」には「市内で食料品を買える店Ａ、Ｂ、Ｃ…」というようにいくつかの店が含まれるが、その上で「特にイオンがいい」という考えを持って発言している、ということになる。

3.1 節に示した《周辺》用法と《範囲》用法と同様に、《暗示》用法についても各名詞が上接した場合の使用を尋ねた。場所を表す名詞としては「イオン」「関西」、時間を表す名詞としては「11 時」「春」、数量を表す名詞としては「30 歳」「3 番目」、人・事物を表す名詞としては「太郎」「椅子」「クラシック」「中華（料理）」とし、3.1 節の漠然用法で使用した名詞と同様のものを用いて調査した。話者が使用するとしたのは以下の 8 項目であり、（11）（14）（15）は「よく使う」、それ以外は「たまに使う」との回答であった。

(9)〈旅行先の候補はいくつかあるが、特に関西は観光地が多く楽しめそうなので、関西に行くことを勧める場合〉

旅行に行くなら関西ラヘンがいい。

(10)〈昼食をとりに行く時間の候補はいくつかあるが、その店は昼前の方が空いているので、11時に行くことを勧める場合〉

昼食を食べに行くなら 11 時ラヘンがいい。

(11)〈旅行に行く日程の候補はいくつかあるが、特に春だと都合がよいので、春に行くことを勧める場合〉

旅行に行くなら春ラヘンがいい。

(12)〈結婚するのに良い年齢はそれぞれだと思うが、特に 30 歳が良いと思っているので、30 歳で結婚することを勧める場合〉

結婚するなら 30 歳ラヘンがいい。

(13)〈発表するのに良い順番はそれぞれだと思うが、特に 3 番目が良いと思っているので、3 番目に発表することを勧める場合〉

発表するなら 3 番目ラヘンがいい。

(14)〈贈り物の候補はいくつかあるが、特に椅子がいいと思っているので、椅子にすることを勧める場合〉

贈るなら椅子ラヘンがいい。

(15)〈移動中に聴く音楽の候補はいくつかあるが、特にクラシックがいいと思っているので、クラシックにすることを勧める場合〉

音楽を聴くならクラシックラヘンがいい。

結果から、《暗示》用法では人を表す名詞＋ラヘンを除き使用されることがわかった。3.1 節で示した《周辺》用法、《範囲》用法では用いられなかった「11 時ラヘン」「3 番目ラヘン」「椅子ラヘン」が使用でき、また「よく使う」という回答が「春ラヘン」「椅子ラヘン」「クラシックラヘン」でみられることから、気仙沼市では《周辺》用法、《範囲》用法といった a「ラヘンによってある範囲を漠然と示す用法」よりも、b「ラヘンによって他の候補を暗示する用法」の方が盛んに使用されることが指摘できそうである。また、「よく使う」と回答されたものは、「春」「クラシック」という比較的広い範囲を表す名詞であり、3.1 節では a - ii の《範囲》用法として設定した者である。このことから、気仙沼市では a - ii の《範囲》用法と b の《暗示》用法のどちらにも捉えられる例文が使われやすいとも考えられるが、本報告では可能性の指摘にとどめたい。

4　まとめ

本報告では、気仙沼市において使用される名詞＋ラヘンの用法についてみてきた。結果としては以下のことが指摘できる。

①ラヘンには、場所を表す名詞、時間を表す名詞、数量を表す名詞、事物を表す名詞が上接しうる。

②ａ「ラヘンによってある範囲を漠然と示す用法」、ｂ「ラヘンによって他の候補を暗示する用法」が使用される。

③ａとｂの用法の中ではｂ「ラヘンによって他の候補を暗示する用法」が使用されやすい傾向がある。また、ａ「ラヘンによってある範囲を漠然と示す用法」の用法の中ではａ-ⅱの上接語の表すものの範囲を漠然と示す用法が用いられやすい傾向がある。

本報告では、気仙沼市における接尾辞「ラヘン」の用法を指摘したが、今後、接尾辞「ラヘン」の使用の地域間の比較をすることを想定し、これまでの調査で用いた例文を使用した部分が多くあるため、上接語等の精緻な記述ができたとは言い難い。また、接尾辞「ラヘン」は新しく生じた表現であるため、その使用には個人差が大きいことも考えられる。したがって、精確な傾向を捉えるには人数を増やして調査する必要があると言える。気仙沼市における接尾辞「ラヘン」の世代別の使用を調べ、その用法の拡張の仕方を捉えることも含め、以上のことは今後の課題としたい。

注

1　『現代日本語方言大辞典』では、気仙沼市は調査地点になっていないが仙台市が調査地点になっており、仙台市の 1901 年生、1904 年生の 2 名の男性に調査した結果が収録されている。「ここら」「そこら」「あそこら」「どこら」はそれぞれ「コゴラ」「ソゴラ」「アソゴラ」「ドゴラ」という回答であった。

文　献

佐藤亜実（2014）「福島県郡山市の若年層における接尾辞ラヘンの用法記述」『国語学研究』53、pp.91-103.

佐藤亜実（2016a）「会議録における接尾辞ラヘンの通時的・地理的展開」『国語学研究』55、pp.15-30.

佐藤亜実（2016b）「会議録における接尾辞ラヘンの用法記述」『言語科学論集』20、pp.91-103.

平山輝男他編（1992-1993）『現代日本語方言大辞典』明治書院.

方言語彙「トゼン類」

八木澤　亮

1　はじめに

1.1　調査の目的

平安時代に国語化を果たした「徒然（とぜん）」という漢語がある。文献国語史では、記録体などの変体漢文から用例が見られ、中世には抄物資料、狂言などにも出現する語である。一見、上層階級の書記言語だが、方言の世界を見渡すと、各地にこの「徒然」に由来する形式が残っている。本稿ではこれを「トゼン類」と呼ぶ。

近年、その全国分布が明らかにされつつあり、文献との対照も試みられているものの、全国的な分析が先にたち、地点をしぼった詳しい記述的調査が十分に行われているとはいいがたい状況がある。そこで、宮城県気仙沼市を例として、トゼン類の記述的調査を試みた。本稿の目的は、気仙沼市におけるトゼン類の語形・意味を明らかにすることである。

1.2　先行研究

まず、巨視的な視点のものから見てみたい。トゼン類の全国分布を扱った研究として、小林・篠崎（2003）、八木澤（2017）などが挙げられる。**図 1** や**図 2** 示したように、東北地方では宮城県・岩手県・秋田県・山形県などで、トゼン類がさかんに使用されていることがわかる。

小林・篠崎（2003）はアンケート記入式の通信法の調査であり、全国 2000 地点の市町村教育委員会の協力を得て、調査票を配布・回収した、大規模な言語地理学的調査である。だが、気仙沼市の調査票は回収されておらず、同市におけるトゼン類の実態は把握できていない。八木澤（2017）も、小林・篠崎（2003）のデータに拠りつつ全国的な視点から言語地理学的分析を行っているため、やはり同市におけるトゼン類の実態が明らかになったとはいえない。

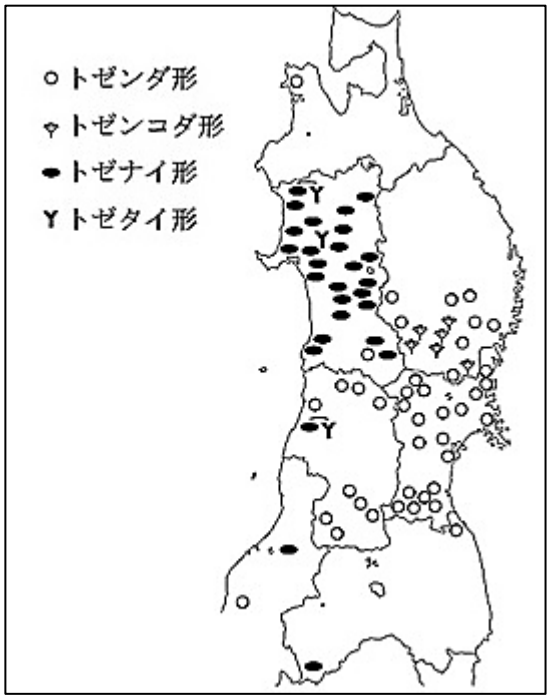


図 1　東北地方のトゼン類の語形

次に、微視的な視点のものを見ていく。菅原（2006）は次のように述べている。

とぜん
『全国方言辞典』によると「退屈だ」の意。仙台はもとより宮城県全体、気仙沼地方でもよく使う。
「なんと春先ぁ**とぜん**で…眠たくて…」（年寄りたちの茶飲み話から）。（90 頁）

図 2　東北地方のトゼン類の意味

これは気仙沼市でトゼン類が使用されていることを裏付けるものだが、「退屈」といっても、どのようなときに使えて、どのようなときには使えないかが不明である。また、**図 1** を見ると、気仙沼市付近では「たいくつだ」の意味も「さびしい」の意味も使用されているように見える。気仙沼市におけるトゼン類の意味の実相を、改めて明らかにしなければならないといえる。

また、宮城県気仙沼市ではないが、岩手県三陸地方を含めたいわゆる「ケセン地方」のトゼン類に言及したものとして、山浦（2000）がある。傍証のひとつとして引いておきたい。

Tozen▷静体詞[注1]
退屈。／「徒然草（つれづれぐさ）」の「徒然（とぜん）」は「退屈」という意味。これはかつて日本中に用いられた共通語だった。今、ケセンに残っている。
Tozen nar dogi a asobi sa ko.　退屈な時は遊びに来い。
A, a, tozen dar. Nani mo sir kodo a nagi.　ああ、あ、退屈だ。何もすることがない。（861 頁）

これを見るかぎり、トゼン類は、文法的な役割に応じてその形態を変えている。そもそも、トゼン類の品詞は何なのか、活用といった現象は見られるのかといった点についても、調査の必要があろう。

このように、気仙沼市におけるトゼン類については、まだ明らかになっていないことが多く、研究の余地が残されているといえるのである。

2　調査について

2.1　調査方法

調査票を作成し、面接調査を行った。具体的には、従来の先行研究等からあらかじめ使用が

期待される語形や意味を尋ねるアンケート式のような項目の他、トゼン類について自由に回答してもらう自由回答の項目も取り入れた調査票を作成した。調査票の構成は、①トゼン類を使うかどうか、使うならばその語形を確認して、②意味を尋ね、③文法的な事項についても尋ねている。

なお、調査は 2017 年 8 月に、気仙沼市民会館にて行った。

2.2　話者

調査には 3 人の話者に協力していただいた。なお、話者の年齢は 2017 年 8 月時点のものである。

話者 A	72 歳	男性	気仙沼市唐桑出身
話者 B	75 歳	女性	気仙沼市波板出身
話者 C	79 歳	男性	気仙沼市内[注2]出身

3　調査結果

3.1　トゼン類の使用の有無と語形

表 1 に、トゼン類を使うかどうか、また、使用する世代、語形をまとめた。

表 1　トゼン類の使用の有無と語形

話者	使用の有無	使用する世代	語形
話者 A	使う	60 代以上	トゼンダ、トゼン
話者 B	使わない（ただし、子供のころ祖母が使っていたのを聞いた）	大正生まれの母など	トゼンダー、トゼン
話者 C	昔は使っていた	本人が 20 代のとき、50 代の人が使っていた	トーゼンダ

3 人の話者はいずれも 70 代であり、気仙沼市の高年層がトゼン類を使用している可能性は高い。現在も使うときがある、と回答した話者 A によれば「若者は使わない」とのことで、現在の高年層とそれより上の世代が使う形式と考えられそうである。

出現した語形は、トゼンダ、トゼンダー、トーゼンダ、トゼンなどであった。形容動詞としての「トゼンダ」、形容動詞語尾の付いていない形「トゼン」の 2 種類に大別できるが、話者が実際に使うときには、「トゼン」ではなく「トゼンダ」の形のほうが普通であるという。これは、**図 1** の宮城県において形容動詞のトゼンダ形が多く見られたことと符合している。

話者 C は「トーゼンダ」という長音化した語形を回答した。**図 1** では、形容動詞は一括して

トゼンダ形とされているが、「トーゼンダ」という長音化した回答もトゼンダ形に含められており、たとえば、次のような語形がそれである。回答者が記入したとおりの表記で示す。

トウゼンダ　（岩手県大船渡市赤崎町字後ノ入、宮城県刈田郡七ヶ宿町字柏木山、山形県上山市皆沢）
トージェンダ（宮城県宮城郡七ヶ浜町汐見台）
トーゼンダ　（山形県最上郡最上町大字黒沢、山形県東置賜郡高畠町大字夏茂）
（小林・篠崎 2003 より）

このことから、気仙沼市で「トーゼンダ」という長音化した語形が見られるのは特異な現象というわけではなく、周辺地域と同様の語形だと考えられそうである。形態面での長音化現象については今後の課題とするが、「当然だ」などとの関係が考えられるかもしれない。

3.2　トゼン類の意味

意味の調査では、まず、トゼン類にはどのような意味があるかを自由に回答してもらった。その結果を**表 2** に示す。

表 2　トゼン類の意味（自由回答）

話者	意味（自由回答）
話者 A	①たいくつだ ②ひとりぼっち、孤独
話者 B	ポツンとひとり。相手がいなくてさびしい。所在ない
話者 C	1 人でポツンとしている。似たことばに「ひまったれ」（＝ひまがある） そのような状況にある人の気持ちを表すことば

自由回答の結果を見ると、トゼン類の意味には「たいくつ」と「孤独」の要素があることがわかる。また、話者 C のように、「時間をもてあます」ということも関係していそうである。

次に、小林・篠崎（2003）の調査でも用いられた選択肢と同じ選択肢を提示して、それぞれがトゼン類のもつ意味に該当するかどうかを確認した。その結果は**表 3** のようになった。

話者 A と話者 C は、表中の〇の記号からわかるように、トゼン類の意味の中心は「たいくつだ」にあると回答した。話者 B によれば、「たいくつだ」のほうが「なんとなくさびしい」よりも中心的な意味であるという。したがって、話者 3 名から、トゼン類の意味は「たいくつだ」が中心的で、「なんとなくさびしい」も一応含む、という回答が得られたといえる。このことから、気仙沼市におけるトゼン類の意味は、大まかに言えば「たいくつだ」ということにはなるが、そこには、孤独によるもの寂しさが含まれており、単に「たいくつだ」ということとは異なると考えられる。次節では、調査票で「たいくつだ」「さびしい」「空腹だ」という気持ち

を感じる状況を設定し、そこでトゼン類が使えるかどうかという調査の結果について述べる。

表 3　選択肢を提示したトゼン類の意味

意味	話者 A	話者 B	話者 C
a.「たいくつだ」	○	○	○
b.「なんとなくさびしい」	△	○	△
c.「とてもさびしい」	×	×	×
d.「口ざみしい」（ちょっと間食でもしたい気分）	×	×	×
e.「空腹だ、腹がへった」	×	×	×
f.「わずらわしい」	×	×	×
g.「うるさい」	×	×	×
h.「恐ろしい」	×	×	×
i.「すごい」	×	×	×

（○はその意味をもつ、△はややその意味も含む、×はその意味をもたない）

3.2.1　調査項目「たいくつだ」の回答

話者 A によると、トゼン類の「たいくつだ」という意味は「ひとりぼっちで、孤独でいる」ことによって生まれるという。また、「農作業をしようと思っていたが雨天によりそれができない」という状況でも「トゼンダナー」と使えるようである。するべきことができなくなって、かといってかわりにすることも特にない状況では使用可能だと考えられる。だが、「町内会の集まりで興味のない話を長く聞かなければならない」ような状況では、トゼン類は使えないという。「つまらない」の意味に近い「たいくつ」は、トゼン類では表すことができないと考えられる。

話者 B によると、「ポツンと 1 人でいて、相手がいなくてさびしい」ときに「トゼンダ」ということである。また、「やることもない」ときにも使えるという。なお、話者 A と同様に「つまらない」の意味に近いトゼン類は使えないという。

話者 C は、「1 人でポツンとして、ひまであるとき」に相手に「トゼンダ」と呟くという。また、独り言としては言わない表現のようである。また、手持ち無沙汰の雰囲気があり、ボヤーっとしていることを指すという。「つまらない」という意味では他の話者同様、使えないという。

このように、「たいくつだ」といっても、特に「孤独による所在なさ」がトゼン類の表すところだと考える。したがって、「つまらない」の意味の「たいくつ」というのとは異なり、その意味ではトゼン類は使えない。

3.2.2　調査項目「さびしい」の回答

話者 A は、親しい人が亡くなったときにはことばが出てこないほどの悲しみがあるが、しばらく経ってからならば、「アイツ　イネート　トゼンダナ」というように、トゼン類を使えるとのことである。これは「にぎやかさがなくなった」ことのあらわれであると思われ、「あるべきものの不在」という要因が感じられる。また、「娘が嫁に行ってさびしい」というときは、トゼン類で表すことができないほどのきわめて大きなさびしさだという。また、「遊びに来た孫が帰った」ときには、トゼン類を使えるという。さびしさの程度性がそこまで強くない事柄に関しては、トゼン類を使用することができると考えられる。

話者 B は、「〇〇さんが亡くなってさびしい」というときには、すぐには「トゼンダ」とは言わないが、しばらく時間が経ってから「トゼンダナー」とは言えるようである。この点は話者 A と共通しており、「あるべきものの不在」というさびしさを感じているものと思われる。

話者 C は、選択肢を提示して確認した意味（**表 3**）では、トゼン類は「なんとなくさびしい」の意味も含むと回答していたが、詳しい状況の調査になると、トゼン類には「さびしい」意味はないという回答になった。

このように、「ちょっとしたさびしさ」や「あるべきものの不在」といったさびしさについては、トゼン類が使えるようである。

3.2.3　調査項目「空腹だ」の回答

話者 A のみ、トゼン類には「空腹だ」という意味はないが、「口がトゼンダ」といえば「口ざみしい」の意味になるという。このことは、小林・篠崎（2003）において見られた次のような言い方と類似するものである。

「口がトジェンだからお茶菓子を食べる。」（宮城県牡鹿郡女川町女川浜字新田）

「口トゼネ」（秋田県南秋田郡天王町天王字天王）

このことは、トゼン類そのものには「空腹だ」という意味はないが、「口」と共起すれば「小腹がすいた」程度の意味は表せるようである。これは、「口ざみしい」という表現から類推して、そこから生まれた派生的な表現である可能性が高い。

3.2.4　意味のまとめ

以上を総合すると、トゼン類は「あるべきものの不在などによって生じる孤独感からくるたいくつさ」を表すとまとめられる。したがって、対象のつまらなさに起因するたいくつさに対しては使えない。また、心理的な感覚から肉体的な感覚へと意味が転移しており、「口がトゼンダ」という言い方で「口ざみしい」の意味としても使用可能である。

3.3　文法的な事項

文法的な事項の調査結果は、**表 4** にまとめた。

表 4　文法的な事項

文法的な事項	話者 A	話者 B	話者 C
「今日はトゼンダ」（述定用法）	○	○	○
「トゼンな時間」（連体修飾用法）	×	×	×
「トゼンの時間」（名詞としての「トゼン」）	×	×	×
「トゼンだろう」（形容動詞未然形）	×	×	×
「トゼンだった」（連用形）	○	×	○
「トゼンではない」（連用形）	×	×	△（トーゼンデサー）
「トゼンになる」（連用形）	×	×	×
「トゼンだ」（終止形）	○	○	○
「トゼンな時間」（連体形）	×	×	×
「トゼンなら」（仮定形）	△（トゼンダラ）	×	○
「トゼンな人」が可能か（属性を表せるか）	×	×	×

（○はその言い方や用法が可能、△は文のかたちを変えれば可能、×は言わない）

トゼン類は、述定用法としては使えるが、連体修飾用法、名詞としての用法は使えないことがわかった。述定としては可能だが、装定としては不可能な特性をもつ形容動詞であるといえる。

各活用形については、連用形（トゼンだった）、終止形（トゼンだ）、仮定形（トゼンなら）が可能であり、それ以外は言わないということであった。これは、形容動詞としての性質は残しつつも、言い方が固定されてきているものと考えられる。あるいは、述定という性質を反映したものかもしれない。ただし、形容動詞は活用があるという観点に立つならば、特定の活用形しか用いられない場合に形容動詞としての性質を十分に持っているといえるのか、疑問は残る。なお、「トゼンではない」という連用形に関して、筆者が提示したものは不可だったが、話者 C は「トーゼンデサー」なら可能だという。「トゼンなら」という仮定形に関して、筆者が提示したものではなく、気仙沼弁の「トゼンダラ」ならば可能だということであった。

「たいくつな人」という意味で「トゼンな人」が可能かを尋ねたところ、話者 3 人とも不可能とのことであった。このことから、「トゼン」は人やものの属性を表す用法は獲得していないと考えられる。

4　まとめと今後の課題

今回の気仙沼市におけるトゼン類の調査では、以下のことが明らかになった。

①気仙沼市では、トゼン類は主に「トゼンダ」という形容動詞として使われており、周辺他地域と同じような様相を示すが、「トーゼンダ」という長音化した言い方も見られる。
②その意味は「あるべきものの不在などによって生じる孤独感からくるたいくつさ」を表す。「口がトゼンダ」という言い方で「口ざみしい」の意味としても使用可能である。
③基本的に述定用法しかなく、わずかに活用するだけである。属性形容詞のような、属性を表す用法は獲得していない。

なお、今回の調査では、「たいくつ」や「さびしさ」を表す語彙の体系のうちで、トゼン類がどのような位置を占めるのか、詳しいところまではわからなかった。この点は、あらためて記述調査の課題としたい。

注

1　山浦によれば、実体の属性を表現する活用のない語。学校文法で形容動詞と言われるものの語幹を指す。
2　話者 C は幼少期に気仙沼市内を転々とされたということで明確な地名を回答されなかったため、出身地は気仙沼市内としている。

文　献

小林隆・篠崎晃一（2003）『消滅の危機に瀕する全国方言語彙資料』科学研究費報告書
菅原孝雄（2006）『けせんぬま方言アラカルト増補改訂版』三陸新報社
八木澤亮（2017）「方言と文献から見た漢語「徒然」の語史」日本方言研究会編『日本方言研究会第 105 回研究発表会発表原稿集』p.1-8
山浦玄嗣（2000）『ケセン語大辞典下』無明舎出版

自由会話の特徴

―高年層と若年層を対象として―

太　田　有　紀

1　調査目的

今回の調査では、気仙沼方言における会話の特徴を見出すべく、自由会話を収集し分析を行った。方言研究においても会話の分析はこれまで多々行われてきたが、本報告では、これまでの方言研究にあまり用いられていない会話分析という方法を用いて気仙沼方言の会話を分析していく。分析の際には、turn-taking 及びあいづちの出現傾向、そして会話の主導権という観点を用いた。

turn-taking やあいづちは、言うまでもなく会話を進めるうえで必要不可欠なものであり、会話を構成する基本的な要素である。にもかかわらず、これらに着目し会話の地域差について論じている研究はまだあまり見られない。

新たな分析視点や方法を用いて方言会話を分析することで、今まで見えてこなかった会話の地域的特徴を解明していくことが可能になると考える。よって本報告は、上記の分析視点から当方言会話がどのような特徴を持っているのか、また世代によって異なる傾向を持つのか明らかにする。

しかし、データ数や分析時間の関係上あくまで傾向を見出すにとどまっており、今後、気仙沼方言における会話の特徴として一般化できるのか検証する必要がある。さらに、気仙沼方言以外の会話の特徴と対比させ、会話の地域差がより明確に示せるようにしたい。

なお、本報告で用いるデータは高年層と若年層の自由会話場面である。今回収集したデータは高年層(以降データ提示の際は O)1 本、若年層(以降データ提示の際は Y)2 本の 3 本だが、分析の関係上、過去の気仙沼調査の会話データ[注1]も使用し、高年層 2 本、若年層 2 本の計 4 本を文字化[注2]し分析対象とした。使用したデータの詳細を以下にまとめる。

〈 表1　分析データ〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
M（男）	昭和12年(75歳)	昭和25年(66歳)	平成4年(24歳)	平成6年(23歳)
F（女）	昭和16年(71歳)	昭和32年(60歳)	平成4年(24歳)	平成7年(22歳)
分析時間	約25分	約30分	約31分	約32分
収録時期	2012年8月	2017年8月	2017年8月	2017年8月

（収録時年齢）

なお、会話参加者同士は知人であり、会話のテーマは自由である[注3]。会話に困ることも考慮し、参考になりそうなテーマを被験者の見えるところに提示した。

2　総論

本節では、分析で得られた気仙沼方言における会話の特徴を論じる。2.1 節では turn-taking を、

2.2 節ではあいづちを、最後の 2.3 節では、先の 2.1 節と 2.2 節を踏まえ会話の展開方法について述べていく。分析にするにあたり必要な認定基準や分類については、各節で論じる。

2.1 turn-taking

turn-taking とは話者交替や発話交替、発話順番などと呼ばれるものである。話し手が話始めてから次の話者が話始めるまで（あるいはポーズによって区切られるまで）が 1 つの turn（発話）であり、あいづちは turn-taking には含まない。さらに、上昇音を伴った発話と、その直後に現れる発話は 1 つの turn とみなす。

以下、例を挙げ簡単に turn 及び turn-taking について説明する。

【例1】
01M ［＊］＊＊いって何イチパチ打ちて:とかづって
02F は:::::::::これを機にやめさせよう.
03M やめね:よhh[h].h＊＊＊はやめないど思う(0.87)

この例では、01M、02F、03M それぞれが 1turn である。そして、01M から 02F へ話し手が移っている状況が話者交替すなわち turn-taking である。02F と 03M の関係も同様に、F から M に話者が移っていることから turn-taking が生じているということになる。以下、データに見られた turn-taking の出現傾向について見ていく。

表 2 は、各データにおける turn-taking の出現数と、1 分間あたりの出現回数を示したものである。データによって出現数に多寡があるため、傾向を探るという点で 1 分間当たりの出現数を求めることにした。その結果、Y－2 以外の 3 つのデータで 1 分間に 8 回前後 turn-taking が出現しておりほぼ同様の傾向が見られた。高年層と若年層に違いがあるかどうかについては、現時点で明言することは難しく今後データを増や傾向を見ていく必要がある。

〈 表2 turn-takingの出現数 （回） 〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
出現数	199	276	218	421
1分間当たり	8.0	9.2	7.3	14.0

さて、turn-taking と一言に言ってもその出現状況が同じであるとは考えにくい。したがって、turn-taking が生じた状況を大まかに分類し気仙沼の会話の特徴がみられるのか探ることにした。

まず、データの観察から、上昇音を伴った発話かどうかという点で大きく 2 つにわけた。そして、上昇音を伴っている発話でも①同意や確認といった話し手が主体となる状況の turn-taking か、②質問や聞き返しのような聞き手が積極的に関わる状況の turn-taking であるかいう点で 2 に分類した。

以下、その 3 つの状況を実例を挙げ説明する。

(A) 上昇音を伴わない turn-taking

紙幅の関係上再掲は避けるが、これは先に提示した例 1 のような 1 つの発話が終わり次の話者が話始めるようなものである。turn-taking の中でも最も基本的なものである。

(B) 上昇音を伴った turn-taking

① 同意・確認

これは、自己確認や他者確認、同意要求などをするときに用いられるもので、質問や聞き返しのように具体的な問いと応答の関係を持たない turn-taking である。

【例2】
01M ん:.hよっくみだっけファミリーなんてさ.h
02F °うん°
03M 弟どしかいねっ**ちゃ？**
→ 04F °うん°
05M 子供だち2人だっちゃ？そのうち.h都合あっがら誰もこれねっ **ちゃ？**
→ 06F うん

例 2 は、法事などがあっても家族がなかなか集まれず、昔ながらの伝統を守っていくのが難しいことを話している場面である。ここで、上昇音を伴った発話は 03M と 05M であるが、どちらも共通語の「・・・でしょ？」のような意味で用いられている。今回の分析では→箇所の応答部分に着目し、「上昇音の発話－応答発話」の関係で 1 回 turn-taking 生じていると認定している。

② 質問・聞き返し

上記①の turn-taking とは異なり、質問や聞き返し等具体的な説明や応答を要求する turn-taking である。

【例3】
01F [えっ]バドミントン**したの？**
→ 02M したした
03F **どこで？**(0.45)
→ 04M えっ(1.15)毎日どっかでやってっか[ら]

これは M の生活について話している場面である。F は 01 と 03 で M に質問し、M は 02 と 04 の質問に対する応答をしている。この場合も先の①の認定と同様応答部分に焦点を当て、「質問発話－応答発話」で 1 回 turn-taking が生じていると認定している。

さて、上記の分類をもとに出現傾向をまとめたものが表 3 である。

〈 表3 状況別turn-takingの出現割合 〉

分 類		O-1	O-2	Y-1	Y-2
(A)上昇なし		83.4%(166)	81.1%(224)	74.8%(163)	67.2%(283)
(B)	①確認・同意	15.1%(30)	14.9%(41)	12.8%(28)	8.3%(35)
	②質問・聞き返	1.5%(3)	4%(11)	12.4%(26)	24.5%(103)
合計		100%(199)	100%(276)	100%(218)	100%(421)

( )内の数字は実数

上記より、高年層若年層共に(A)の上昇音を伴わない turn-taking が最も多く出現していることが

わかる。次いで高年層では(B)の①確認・同意の turn-taking が約 15%出現しており 2 つのデータの傾向は一致している。

一方、若年層のデータでは上昇音を伴った turn-taking の 2 つの合計が 25%～30%強の値で現れており、話し手から聞き手への働きかけ、聞き手から話し手への働きかけが高年層よりも頻繁に行われていることが明らかとなった。若年層と高年層の特に大きな違いとして 質問・聞き返しの turn-taking の使用が挙げられる。

以上、turn-taking が生じている状況の異なりを見たが、この違いは会話を展開させるうえでも影響を与えている可能性があると考えられる。

2.2　あいづち

あいづちは、その認定基準が研究者によって異なる。本報告では比較的広く捉え、表現形態による分類と生起位置から比較的客観的に認定することが可能である Den, et.al(2011)を用いた。しかしこれには笑い[注4]や turn-taking に関わるあいづち[注5]についての基準については記述がない。よって適宜変更を加えている。

〈 表4　あいづちの出現数（回）〉

	O-1	O-2	Y-1	Y-2
出現数	303	419	273	387
1分間当たり	12.1	14.0	9.1	12.9

表 4 は各データにおけるあいづちの出現数と 1 分間におけるあいづちの出現回数を求めたものである。この表から、1 分間におけるあいづちの出現数は、Y－1 を除く 3 つのデータでは 12%～14%と同様の傾向を示している。Y－1 は他のデータよりも少ないが、この結果から、あいづちの出現傾向には世代による大きな差は無いと考えられる。

〈 表5　地域若年層のあいづちの出現数（/分）〉

	データ1	データ2	データ3	データ4
大阪	9.3	9.5	10.7	14.9
東京	8.5	9.4	11.7	11.6

また、当方言の 1 分間当たりのあいづちの出現は多いのか少ないのか不明であったため、参考までに、他地域の若年層のデータと比較してみることにした。他地域若年層の 1 分間における出現回数を表 5 に示す。

表 4 と表 5 の比較より、東京よりは気仙沼の方が若干多いことがわかるが、大阪と気仙沼ではほぼ同じような出現傾向であった。

2.3　会話の展開方法

当方言の会話を観察すると、turn-taking がある程度出現しているにも関わらず、大阪や東京のように活発な会話が展開されていないように思われる。

よって本節では、2.1 節と 2.2 節で述べたことを踏まえ気仙沼の会話がどのように展開されているのか考察する。以下、高年層、若年層の順で傾向を述べる。

【高年層】

高年層の会話では、同意や確認の上昇音に関わる状況で turn-taking が出現する傾向があること

は 2.1 節で述べた。この同意・確認の上昇音の場合、「同意・確認発話→応答発話→(先の話しての)発話の継続」という流れで会話が続いていくことが主である。同意・確認発話の後に現れる応答は単純なものが多く、応答発話を行った話し手がそのまま turn を保持することは稀である。つまり、モノローグ場面に非常近い状態で会話が展開される傾向があると言える。

下記例 4 は、震災の時のことを話している場面で、矢印のついている 01M と 05M が同意・確認の上昇音を伴った発話(下線部太字)である。上昇音を伴った発話の後には、F が「はいはい」という単純な応答をしている。上昇音を伴った turn-taking でもこの①のタイプは、聞き手だった発話者が turn を保持し会話を展開させていくことは無く、もとの話し手が再び turn を取り発話を継続しており、会話を積極的に展開させるようなものでないことは明らかである。

【例４】

→	01M	まずあのそん時あの(0.35)電気も切れた**でしょ？**＝	同意・確認	Ⅰ
	02F	=はいはい	応答	Ⅱ
	03M	その：今度は水道も止[まる]	発話継続	
	04F	[水]道も止まったし[ね]	あいづち	
→	05M	＞[あの]こー＜あの(0.5)ど＝	同意・確認	
		＝こがぱー破裂した**からね？**		
	06F	はいはい	応答	

同意・確認の turn-taking では、例 4 の右端に示した通り少なくとも 2 回の turn-taking(Ⅰ とⅡ)が関わっている。つまり上昇音を伴わない turn-taking の約 15%は、Ⅱのような turn-taking であると言える。

また、2.2 節で述べた通り気仙沼会話ではあいづちが比較的多く出現している。この点からも会話の展開は turn-taking のやり取りが活発でなく互いに話を聞きながら会話が展開されていく可能性が高い。

以上のことから、気仙沼の高年層の会話の傾向を考えると、話し手が会話の主導権を握り、聞き手の反応を引き出しながら会話を進めている傾向があると言える。言い換えれば、聞き手は話し手から turn を譲られるまであいづちを主に用いて、話し手が持つ会話の主導権（floor）を維持するということである（受け身的な会話の展開)。

【若年層】

若年層の会話では、同意・確認の上昇音の出現も観察されたが、それと同様かそれ以上に、質問・聞き返しといった状況での turn が観察された。

質問や聞き返しの場合、現在進行している発話内容についてのものが主である。つまり、turn-taking は生じているが、基本的には話し手の発話内容に沿った形で聞き手が質問発話を行い会話を展開しているわけである。

質問・聞き返しの例として例 5 を挙げる。例 5 は、M の住む町について F がどんな街か質問した

場面である。ここでは 03F と 06F が質問の発話になっており、F の質問に M は 05 と 08 で応答している。

ここで重要なことは、M の住む町について詳しいことを F は知らない。よって質問に答えるのは話者となった M であるにも関わらず、質問を矢継ぎ早に浴びせる形で F は町の様子を聞きだそうとしている点である。これは、本来の話し手である M に会話の主導権を持たせたまま、F が質問を用いて、会話を進め M の持つ会話の主導権(floor)を維持していると考えられる。

【例5】
01M　どう:(0.49)防潮堤が:[で]きたらしい(0.98)
02F　　[うん]
→ 03F　えh[hh見]た？見た？見て[ない]の？(0.41)
04M　　[hhh]　　＞[なんだ？]＜
05M　見るとあるような気もするけど(0.57)
→ 06F　すーえっ[そんなに]目立ってないの？そんなでか(.)くない？＝
07M　　[そもそも]
(06F)　＝高[くない]？
08M　　[ん::]:＞なんか＜大谷海岸＝

((04F)は04F からの続きの発話であることを示す)

以上より、若年層の会話では話し手が聞き手に働きかけながら会話を展開する高年層と同様の傾向を持つと共に、聞き手が、質問や聞き返しを積極的に行うことで情報を聞き出し、話し手の会話の主導権を奪うことなく話を展開していく傾向があると言える（受け身的にも積極的にもなる 2 面性を持った会話の展開)。

注

1　『伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集―宮城県沿岸 15 市町―』の宮城県気仙沼市自由会話より。今回のデータでは O－1 にあたる。

2　文字化に使用した転記記号は資料参照のこと。

3　過去の調査で収録した会話は「震災のときのこと」テーマを設定している

4　笑いもあいづちのように用いられることから、音声で聞こえる範囲で認定した。

5　turn-taking に関わるあいづちは、前の発話の直後に現れ、かつ、あいづち表現の発話後 0.3 秒以上の間があった場合、発話時の音調や発話内容を検討したうえで最終的にあいづちか否かの認定を行った。

資　料

文字化の際の転記記号を以下に示す（串田他編（2005）を参考に必要に応じて変更)。

？	上昇調のイントネーション	．	下降調のイントネーション
：	音が伸ばされている状態を示す	(…)	発話が不明な部分を示す
［	二人の発話の重なりの始まる場所	］	二人の重なりの終わる場所

（0.3）0.2 秒以上の沈黙の長さを（　）の数字で示す　　（.）　0.2 秒以下の沈黙

hhh　笑いを示す　　.h　吸気音を示す

→　注目箇所を示す　　＊＊　固有名詞に関係するもの

＞＜　記号で囲まれた発話は他より速度が速いことを示す

＜＞　記号で囲まれた発話は他より速度が遅いことを示す

°°　記号で囲まれた発話は他より小声で話されていることを示す

＝　言葉と言葉、発話と発話が途切れなくつながっている個所を示す

↑　次に現れる発話が高い調子から始まっていることを示す

文　献

太田有紀(2015)「地域によるあいづちの差異―floor との関係から―」『国語学研究』55

串田秀也・定延利之・伝康晴編（2005）『シリーズ文と発話 1　活動としての文と発話』ひつじ書房

伝康晴(2015)「第 5 章　対話への情報付与」『講座日本語コーパス 3　話し言葉コーパス　設計と構築』朝倉書店

Den, et al.（2011）" Annotation of Japanese response tokens and preliminary analysis on their distribution in three-party conversations.". *Proceedings of the 14th Oriental COCOSDA*,168-173.

東北大学方言研究センター編(2013)『 伝える、励ます、学ぶ、被災地方言会話集―宮城県沿岸 15 市町―』

「疑似会話型面接調査」の試み

小　林　　隆

1 本報告の目的

今回の気仙沼市方言調査において試みた「疑似会話型面接調査」の方法について報告する。「疑似会話型面接調査」とは何かを説明し、具体的に使用した調査票について解説する。結果を十分分析するに至っていないので、調査方法の紹介と簡単な考察が主となる。

『生活を伝える被災地方言会話集 1～4』は、場面設定会話のかたちをとった方言談話資料である。各場面、1 回分の会話しか公開していないので、その会話に現れた特徴が気仙沼市方言として安定的なものか確認する必要がある。この課題に応える方法としては、同じ場面の会話のサンプルを増やすことが妥当であり、第 4 集の会話収録の際には、そうした観点から、同一場面の会話を多少方式を変えながら再収録するという試みを行っている。

しかし、今回の気仙沼市方言調査は、調査全体が面接質問式調査でなされることが決まっているので、一般的なかたちでの会話の収録・検討はできない。それでも、面接質問式調査の範囲内で会話について見ていくような工夫はできるかもしれない。従来、面接調査と会話収録とは目的がまったく別であるとみなされてきたが、ここでは、面接調査によって会話の特徴をとらえる試みを行ってみたい。

2 疑似会話型面接調査とは

「疑似会話型面接調査」とは、会話の展開を想定し、その進行に沿って、各発話（ターン）をどう行うかを質問によって明らかにする方式である。1 人のインフォーマントに、2 人の話者を演じ分けてもらい、あたかも会話をしているかのように調査を進める。面接による質問式の調査でありながらも、場面設定会話を収録するような趣をもった調査方式とも言える。

談話資料の形態を、椎名渉子・小林隆（2007）では次のように分類した。

a. 自由会話

a-1. 話題自由型：話題は自由とし、その場の話者の選択に任せる方式

a-2. 話題指定型：話題を指定し、話者にはその話題について語り合ってもらう方式

b. 場面設定会話

b-1. 展開自由型：シナリオは指定せず、話の展開を話者の自由に任せる方式

b-2. 展開指定型：シナリオを指定し、話の展開に制限を加える方式

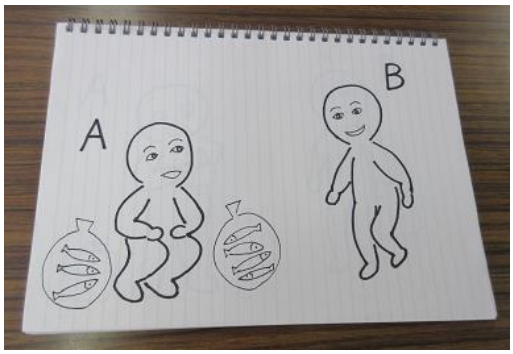
このうち、自由会話の特徴を疑似会話型面接調査でとらえることは難しい。この方法は、1 人の

インフォーマントが二役を演じるという点でいわば「独り芝居」であり、そのやり方で自由会話を演じることは困難と言わざるを得ない。一方、場面設定会話はその展開が予測可能である分、質問によってある程度発話の内容をとらえることができる。このとき、質問者が話者の交替のみを指示するだけで発話の内容に立ち入らないならば「展開自由型」の疑似会話型面接調査となる。一方、「まず、依頼してください」「次に、承諾してください」「次は、感謝してください」などのように発話の内容まで指示するならば、それは「展開指定型」の疑似会話型面接調査と言える。

今回採用した方法は、「展開自由型」の疑似会話型面接調査である。「依頼」「申し出」といった場面は設定したものの、その展開はインフォーマントに任せることとし、特に発話の内容を指定することはしなかった。椎名渉子・小林隆（2017）で指摘したように、展開指定型は複数地点の比較の点でデータに統一性を確保できるが、一方で、談話展開の地域による違いを見逃してしまう恐れがある。

以上、大まかに「疑似会話型面接調査」について説明した。今回の調査に即して、もう少し具体的な点を補足しよう。まず、今回の調査では、質問者が、各発話について、その都度、回答された形式の形態や意味・待遇度、あるいは予想される表現などについての確認を行った。その点は、一般的な面接質問式調査と同様であるが、これだと、話の流れを断ち切ることになり、会話の展開を見るには適当ではなかったかもしれない。インフォーマントに、まず最後まで通して会話を演じてもらい、そのあと、各発話に戻って確認を行う方法もありえたと思われる。

また、今回の調査では、補助道具として該当する場面の絵を用意し、それをインフォーマントに見せながら調査を行った。登場人物の 2 人を配置したもので、話者交替を行うたびに、どちらの人物の発話の番であるか、調査員が指さしながら指示を行った。これは、インフォーマントがその場面を理解するための一つの措置であるが、こうした工夫はまだほかにも考えることができるかもしれない。



補助道具としての場面の絵

3 調査内容

『生活を伝える被災地方言会話集』の中で、今回の調査で扱った場面は次のとおりである（「1-1」は第 1 集の 1 番目の会話であることを示す）。依頼・申し出とその受けの場面を対象とした。

●要求表明系－要求反応系〈頼む－受け入れる〉

1-1.「荷物運びを頼む」

1-2.「お金を借りる」

1-3.「役員を依頼する」

2-1.「醤油差しを取ってもらう」

●恩恵表明系－恩恵反応系〈申し出る－受け入れる／断る〉

1-14.「荷物を持ってやる」
1-15.「野菜をおすそ分けする」
1-16.「ゴミ当番を交替してやる」

具体的な調査内容を次に示す。調査票から質問部分を抜粋したものである。インフォーマントに対して、まずどのような場面かを提示し、次いで、会話の展開に沿って、例えば 1.1、1.2、1.3、1.4 の順に質問していく。(　) 内に依頼、承諾、感謝、配慮と入れてあるのは、共通語の会話の場合、その位置で期待される発話内容であり、話者に対する指示ではない。

○ＡさんとＢさんは、近所の知り合い同士です。このＡさんとＢさんになったつもりで、会話をしてみてください。

(1) 荷物運びを頼む〈頼むー受け入れる〉　会話集 1-1.「荷物運びを頼む」

【場面提示】**Ａさんは、親戚からサンマをもらって帰ってきました。ところが、たくさんもらいすぎて重かったため、家までもう少しのところまで来て疲れてしまい休んでいました。ちょうどそこにＢさんが通りかかったので、家まで一緒に運んでもらおうと思います。**

1.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。(依頼)
1.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。(承諾)
1.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。(感謝)
1.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。(配慮)

(2) お金を借りる〈頼むー受け入れる〉　会話集 1-2.「お金を借りる」

【場面提示】**ＡさんはＢさんと一緒に、共通の知人のお見舞いに行きます。病院に行く前に、見舞いの品を買いにお店にやってきました。品物を選んでお金を払おうと思ったところ、手持ちのお金が足りないことに気付きました。そこで、一緒にいたＢさんからお金を借りようと思います。**

2.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。(依頼)
2.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。(承諾)
2.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。(感謝)
2.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。(配慮)

(3) 役員を依頼する〈頼むー受け入れる〉　会話集 1-3.「役員を依頼する」

【場面提示】Ａさんは地域の地区会長をしています。他の役員をしていた人が体調を崩して辞めることになりました。後任を探していますが、なかなか引き受けてくれる人がいません。そこでＡさんはＢさんに役員になってもらおうと、Ｂさんの家を訪ねます。

3.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。（依頼）

3.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。（承諾）

3.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（感謝）

3.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

⑷ 荷物を持ってやる〈申し出る－受け入れる〉　会話集 1-14.「荷物を持ってやる」

【場面提示】Ａさんは、道端に荷物を置いて休んでいるＢさんに出会いました。聞けば、Ｂさんは郵便局に荷物を運ぶ途中だそうです。Ａさんは、Ｂさんの代わりに荷物を持ってやろうと思います。

4.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。（申し出）

4.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。（承諾・感謝）

4.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

4.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。

⑸ カツオをおすそ分けする〈申し出る－受け入れる〉　会話集 1-15.「野菜をおすそ分けする」

【場面提示】Ａさんは、親戚からカツオを１本もらいました。とても食べ切れないので、Ｂさんに分けてやりに行きました。

5.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。（申し出）

5.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。（承諾・感謝）

5.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

5.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。

⑹ ゴミ当番を交替してやる〈申し出る－受け入れる〉　会話集 1-16.「ゴミ当番を交替してやる」

【場面提示】東京にいるＢさんの娘夫婦に赤ちゃんが生まれました。Ｂさんは、あさってあたり、孫の顔を見に東京に行ってきたいと思っていますが、今週は町内のゴミ当番にあたっていて、どうしたものかと迷っています。Ａさんは、それなら自分がゴミ当番を代わるから、東京へ行

ってくるようにＢさんに勧めます。

6.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。（申し出）

6.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。（承諾・感謝）

6.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

6.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。

○今度は夫婦の会話です。

⑺ 醤油差しを取ってもらう〈頼む－受け入れる〉　会話集 2-1.「醤油差しを取ってもらう」

【場面提示】家族でテーブルを囲み、食事をしています。あなたは醤油差しを取ろうと思いますが、少し離れた位置にあり、手が届きません。そこで、醤油差しの近くにいる妻（ないし夫）に取るように言います。

7.1. このとき、あなたが夫なら、妻にどんなふうに言いますか。（依頼）

7.2. それでは、あなたが妻なら、夫にそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（承諾）

7.3. それでは、あなたが夫なら、妻に醤油差しを取ってもらって、何か言葉を返しますか。（感謝）

7.4. それでは、あなたが妻なら、夫にそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

4 調査結果

調査は 2 名のインフォーマントに対して行った。いずれも気仙沼市生え抜き話者である。

インフォーマント 1：1953 年生まれ（調査時 64 歳）、男性

インフォーマント 2：1941 年生まれ（調査時 76 歳）、男性

「1. 荷物運びを頼む」の場面について結果を見てみよう。その前に、場面提示の内容と質問を再掲する。

【場面提示】Ａさんは、親戚からサンマをもらって帰ってきました。ところが、たくさんもらいすぎて重かったため、家までもう少しのところまで来て疲れてしまい休んでいました。ちょうどそこにＢさんが通りかかったので、家まで一緒に運んでもらおうと思います。

1.1. このとき、あなたがＡさんなら、Ｂさんにどんなふうに言いますか。（依頼）

1.2. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、どのように言葉を返しますか。（承諾）

1.3. それでは、あなたがＡさんなら、Ｂさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しま

すか。（感謝）

1.4. それでは、あなたがＢさんなら、Ａさんにそんなふうに言われたとして、何か言葉を返しますか。（配慮）

これらの質問に対するインフォーマントの回答は次のとおりである。①②③は回答に複数のバラエティがあったことを示す。インフォーマント 2 は 1.2 以下の質問に対して、2 通りの展開を回答したので、そのように表示してある。(　) 内は、その部分は発話されなかったものの、回答の流れから見て、補って考えることができることを表す。なお、「スケル」は「助ける」が語源であるが、気仙沼市では「～テスケル」のように補助動詞化した用法が認められる。

調 査 の 様 子

▼インフォーマント 1

1.1. ①コノサンマー　モラッテキタンダケントモ、アノー　ハコンデスケネスカ。

②イマ　サカナ　モラッテキタンダケントモ、チョット　オモタクテー　イエマデ　ヒトリデ　ハコベネンデ、ハコンデスケネスカー。

1.2. ①ンー　ワカッタ。イーヨー。

②（ンー　ワカッタ。）イーテバ。

③（ンー　ワカッタ。）スケッカラ。

1.3. ①ンデ　コイズ　モッテケロ。

②ンデ　コイズ。

③タノム。

1.4. ①何も言わない。

②ン。

▼インフォーマント 2

1.1. ①コレー　イッパイ　サカナッコ　モラッテ　ココマデ　キタンダケントモ、ツカレテシマッタカラ、スコス　モッテスケロヤ。

②（コレー　イッパイ　サカナッコ　モラッテ　ココマデ　キタンダケントモ、ツカレテシマッタカラ)、チョット　ウチマデ　モッテスケロヤー。

【展開 1】

1.2. ①ホンデ　ソンナニ　イッペ　モラッタンダラバ、オレサモ　スコス　ワケテクレ。

②（ホンデ　ソンナニ　イッペ　モラッタンダラバ、オレサモ　スコス）
オスソワケステケロ。
③（ホンデ　ソンナニ　イッペ　モラッタンダラバ、オレサモ　スコス）
オスソワケスロヤ。

1.3. ①ホンデヤ　オメニ　ニンズーブン　アケ゜ルガラ。
②（ホンデヤ　オメニ　ニンズーブン）ケッカラ。
③（ホンデヤ　オメニ）スゴヒキ（ケッカラ）。

1.4. ①アー　アリカ゜ト。

【展開 2】

1.2. ①ンデ　オレ　モッテスケッカ。
②（ンデ　オレ）モッテスケッカラ。

1.3. ①ンデ　タノムカラ。モッテスケロヤ。

1.4. ①何も言わない。

5 結果から見えてくること

以上の結果と比較するために、会話集に収録された同じ場面の会話を掲載する。なお、この会話ではAが女性話者、Bが男性話者である。AとBとの関係は、ここでも近所の知り合い同士である。

1-1. 荷物運びを頼む

001A：Bサーン　アダシ　コレ　サンマ　モラッテ、イッパイ　モライスギダヤー。
Bさん　私　これ　さんま　もらって、いっぱい　もらいすぎたよ。

002B：ナーント　ドッサリデー。
なんと　どっさりで。

003A：ンダカラー。　アノ　モジキレネモンダガラ　モッテスケテモラッテ
そうなんだよ。あの　持ちきれないもんだから　持って[助けて]もらって

イーベガネー。
いいだろうかね。

004B：アンダノゴッダカラ　ヨグタゲダンダベヨ。
あなたのことだから　欲張ったんだろうよ。

005A：ンダカラー。　ナーニ　イッパイ　モッテゲモッテゲッテ　ユーガラネ
そうなんだよ。なに　いっぱい　持って行け持って行けって　言うからね

（B　ウン）ダレガサ　アゲテモイーガド　モッテ　モラッタノッサ。
（B　うん）だれかに　あげてもいいかと　思って　もらったのさ。

006B：アーアー。イー　イーガスヨ　モッテスゲッガラ。
あーあー。××　いいですよ　持ってやるから。

007Ａ：ハー。ホンデ　　タスカルガラ（Ｂ　ウン）Ｂサンモ　ハンブン
　　はい。それで[は]　助かるから　（Ｂ　うん）Ｂさんも　半分

　　モッテッテケライン。
　　持って行ってください。

008Ｂ：ナーヌ　イーガスー。コゴデ　ワゲルスカ。
　　なに　　いいです。　ここで　分けますか。

009Ａ：ンダネー（Ｂ　ウン）モジキレネガラ　（Ｂ　ウンウンウンウン）
　　そうだね（Ｂ　うん）持ちきれないから（Ｂ　うんうんうんうん）

　　タベキレナイシー。
　　食べきれないし。

010Ｂ：ホンデァ　　コゴデ　ワゲッガ。
　　それじゃあ　ここで　分けるか。

011Ａ：ンダネー。
　　そうだね。

012Ｂ：ウン　ソースレバ（Ａ　アー　ヤ）アンダモ　ラクダイッチャナ。
　　うん　そうすれば（Ａ　あー　×）あなたも　楽だろうな。

013Ａ：ンダネー（Ｂ　アー　ヤ）モーシワゲネーケッド　ンデ。
　　そうだね（Ｂ　あー　×）申し訳ないけれど　　それで。

014Ｂ：オライドゴ　チョード　サンマ　キレダガラッサ。
　　うち　　ちょうど　さんま　なくなったからさ。

　　（Ａ　アー　ホンデ　　イガッダヤ。）ウン　ウンウン。
　　（Ａ　あー　それで[は]　よかったよ。）うん　うんうん。

015Ａ：ハイ。
　　はい。

016Ｂ：ホンデネー。
　　それで[は]ね。

017Ａ：ハイハイ。
　　はいはい。

018Ｂ：アリガトーネー。
　　ありがとうね。

019Ａ：ハーイ　カエッテ　アリガトゴザリシター。
　　はい　　かえって　ありがとうございました。

この会話と、先に示した疑似会話型面接調査の結果を比較すると、まず会話量（情報量）に大きな違いがあることがわかる。実際の会話は開始から終了まで 19 個の発話（ターン）から構成されているが、疑似会話型面接調査の方は 3〜4 発話で終わっている。前者にはさまざまな情報の交換が盛り込まれているのに対して、後者は会話の骨組みとして必要最小限の内容から成り立っていると言ってよい。

そのほか、注目すべき点をいくつか挙げてみよう。

まず、実際の会話では、冒頭、依頼する側の話者が、自分の置かれている困難な状況を感嘆的に言い放ち、それに受け手の側の話者がやはり感嘆的に応じるというやりとりが観察される。

001Ａ：Ｂサーン　アダシ　コレ　サンマ　モラッテ、イッパイ　モライスギダヤー。
　　Ｂさん　私　これ　さんま　もらって、いっぱい　もらいすぎたよ。

002Ｂ：ナーント　ドッサリデー。
　　なんと　どっさりで。

こうした依頼側の状況説明の部分は、疑似会話型面接調査では、2 人の回答とも「コノサンマーモラッテキタンダケントモ」「コレー　イッパイ　サカナッコ　モラッテ　ココマデ　キタンダケントモ」のように依頼文の前件として従属節の中に押し込められてしまっている。感情的・動的な表現と論理的・静的な表現との違いがここに見られる。筆者のこれまでの観察では、感情的・動的な表現の多用がこの地域の会話の特徴のひとつではないかと思われる。その点では、今回の疑似会話型面接調査は、そうした特徴をつかみきることができなかったと言えるかもしれない。これは、会話の現場の臨場感をいかに作り出すかという問題と関わっていよう。

次に、受け手の側の承諾意志の表明に対して、依頼の側がどのように応じているかに注目してみる。実際の会話では、次のようになっている。

006Ｂ：アーアー。イー　イーガスヨ　モッテスゲッガラ。
　　あーあー。××　いいですよ　持ってやるから。

007Ａ：ハー。ホンデ　タスカルガラ（Ｂ　ウン）Ｂサンモ　ハンブン
　　はい。それで[は]　助かるから　（Ｂ　うん）Ｂさんも　半分

　　モッテッテケライン。
　　持って行ってください。

ここには、いわゆる感謝の表現が見当たらない。「タスカルガラ」とは言っているものの、共通語の感覚ではここで発話されることが期待される「ありがとう」に当たる言い回しが現れてこないのである。この点は、疑似会話型面接調査の結果でも同様である。「ンデ　コイズ　モッテケロ。」「ンデ　タノムカラ。モッテスケロヤ。」のように回答がなされ、特に感謝の言葉は口にされていない。いわゆる感謝の気持ちが言語形式として共通語ほど十分に表現されないことは東北地方全般に共通する特徴と思われるが、そうした部分は疑似会話型面接調査においても把握できたと言えよう。言語形式の細部の違いではなく、言語運用の発想法に関わるような部分は、この方式でもある程度とらえることができそうである。

最後に、会話の内容に関わることとして、実際の会話では次のようにサンマをその場で分配するというやりとりが行われている。

007Ａ：ハー。ホンデ　　タスカルガラ（Ｂ　ウン）Ｂサンモ　ハンブン
　　はい。それで[は]　助かるから　（Ｂ　うん）Ｂさんも　半分

　　モッテッテケライン。
　　持って行ってください。

008Ｂ：ナーヌ　イーガスー。コゴデ　ワゲルスカ。
　　なに　　いいです。　ここで　分けますか。

これは、疑似会話型面接調査でも似たような展開がとらえられている。すなわち、インフォーマント 2 の回答で、「1.2. ①ホンデ　ソンナニ　イッペ　モラッタンダラバ、オレサモ　スコス　ワケテクレ。」「1.3. ①ホンデヤ　オメニ　ニンズーブン　アケ゛ルガラ。」のようになっているのがそれである。もちろん、この場合には、受け手の側が催促しており、実際の会話で依頼者側が申し出ているのとは異なる。しかし、このような会話の現場でのサンマの分配という事態が共通して出現しているのは偶然ではなかろう。地域社会の生活の中で習慣化された行為が、場面設定会話だけでなく、疑似会話型面接調査でもとらえられたと考えることができる。

6 おわりに

ここでは、今回の気仙沼市方言調査において試みた「疑似会話型面接調査」の方法について報告した。「疑似会話型面接調査」とは何かを説明し、具体的な調査内容についても解説した。また、結果についても簡単にコメントしたが、最初にも断ったように十分な分析には至っていない。この方法が会話の特徴を把握するうえでどの程度有効なものであるかは、今後、さらに深めて考えてみたいと思う。

文　献

椎名渉子・小林隆（2017）「談話の方言学」小林隆・川﨑めぐみ・澤村美幸・椎名渉子・中西太郎『方言学の未来をひらくーオノマトペ・感動詞・談話・言語行動ー』ひつじ書房

第２部

声で残す方言詩集
『生ぎるっちゃ－大震災を乗り越えて－』

方言詩集『生ぎるっちゃ』について

二〇一三年、東日本大震災の被災者が方言で思いを綴った詩集『生ぎるっちゃ』が発表された。編集したのは、二〇〇八年から活動する「方言を語り残そう会」（代表・金岡律子氏　会員一六名　平均年齢七六歳）である。「方言を語り残そう会」は、方言を後世に伝えていくことを目的に名取市在住の市民を中心に設立された。子どもたちに方言を身近に感じてほしいという願いから、昔話の方言による翻訳や小学校での方言による昔話の語り聞かせなどを活動の中心に据えていたが、東日本大震災後は美田園第一仮設住宅での慰問活動を定期的に続けている（二〇一八年三月に終了）。特徴的なのは、方言を全面に打ち出した点である。

こうした慰問活動と並行しておこなわれたのが震災を方言で詠んだ句集『負げねっちゃ』と詩集『生ぎるっちゃ』の作成である。どちらも会のメンバーだけでなく、仮設住宅の住民や被災者支援を続ける「みやぎ生協仙南ボランティアセンター」の有志、そして名取市以外で生活する被災者が作品を寄せている。

『負げねっちゃ』は震災から半年しか経過していない時期に作成された句集であり、震災とその後の生活の生々しい記憶が一四二句と一篇の詩に凝縮されている。一方、『生ぎるっちゃ』には五七篇の作品が収録されているが、句、五行詩、自由詩など形式は様々である。震災から二年以上が経過するなかで被災者それぞれの心情を表現しやすい形でってほしいと形式を整えなかった結果、震災から数年が経過した被災者それぞれの物語が『生ぎるっちゃ』のなかに浮かび上がることとなった。

詩集のタイトルである『生ぎるっちゃ』の意味を正確に表現できる共通語はない。終助詞の「ちゃ」は、聞き手が知っているはずの事柄を示し、それを確認させるという働きがあり、共通語の「でしょう」や「よね」などのような意味を持つ。また、名取市では話し手の意志を表明する場合も使用される。つまり、『生ぎるっちゃ』というタイトルは、「生きるでしょう」「生きるよね」「生きるよ！」といったメッセージを放つことができるのである。

『生ぎるっちゃ』の発表から四年が経過した二〇一六年、この詩集の刊行に関わった被災者の方々が加した。家族を失った人、家を流された人、失ったものはなくとも震災後の人間関係で心に傷を負った人など、二六名それぞれに震災後の物語がある。

方言の使用という視点から見ても、二六名が使う方言は様々だ。たとえば、『生ぎるっちゃ』は、東北方言では語中のカ行音の「き」が有声化してガ行音の「ぎ」になる発音上の変化を反映させたタイトルだが、朗読者全員がこの発音をするわけではない。他の発音や語彙でも同様である。伝統的な東北方言の衰退は確実に進んでいるのである。

だが、方言で震災を伝えたいという被災者にとって、方言が心理的な拠り所になっているのも事実である。また、日常的に方言を使用していないということが、情緒的な表現と

て方言の価値を高めているのも確かである。『生ぎるっちゃ』の作成は、こうした方言をめぐる現状の線上にあるが、被災者二六名による『生ぎるっちゃ』の朗読は、方言の情緒性を喚起するだけでなく、消えつつある方言に新たな命を吹き込むこととなった。というのも、朗読者が久しぶりに口から発した方言もあれば、代読の担当者が自分の知らない方言の意味・発音・アクセントについて調べ再現を試みた方言も少なからずあるからである。

今回の企画は、二〇一八年三月に、「方言を語り残そう会」が慰問活動を続けてきた美田園第一仮設住宅の閉所の決定がきっかけである。『生ぎるっちゃ』の朗読の CD の制作は、「方言を語り残そう会」が七年間続けてきた仮設住宅での慰問活動を締めくくる事業となった。

『生ぎるっちゃ』の朗読について

「方言を語り残そう会」が二〇一三年に発表した『生ぎるっちゃ』の朗読には宮城県に在住する二六名（「方言を語り残そう会」からは一三名）が参加した。朗読者の在住地の内訳は、名取市（二〇名）、仙台市（三名）、岩沼市（二名）、塩釜市（一名）である。

このなかで東日本大震災の津波で甚大な被害を受けた沿岸地域の閖上に在住していたのは五名（現在、四名は名取市、一名は仙台市に在住）、下増田に在住していたのは三名（現在、名取市に在住）である。

なお、朗読者の言語形成期に注目すると、現在の在住地と異なるケースが多い。他県の出身者は、奈良県一名（名取市）、岩手県一名（名取市）、徳島県一名（名取市）、宮城県内柴田町一名（名取市）、岩沼市二名（名取市）、東松島市一名（名取市）、気仙沼市一名（仙台市）、大崎市岩出山町一名（仙台市）、亘理町一名（岩沼市）である。だが、二六名の朗読者のうち、津波の被害を受けて仙台に移住した一名を除けば、現在の在住地での暮らしが最も長い。つまり、『生ぎるっちゃ』の朗読の CD は、生粋の名取出身者の声だけを集めたものではなく、現在名取市および名取市近郊で生活している五十代から九十代の声を集めたものである。

朗読の収録は三回に分けた。

・二〇一七年一二月二三日…名取市市民活動支援センターの小会議室にて十二名。

・二〇一八年一月一三日…名取市市民活動支援センターの中会議室にて十一名（うち

ち、一名は一回目の収録にも参加）

・二〇一八年一月二七日…美田園第一仮設住宅集会場にて三名。美田園北集会場にて一名。

収録では、作品を三回朗読するよう依頼した。朗読後、朗読者が作者である場合には作品に込めた思いや発表から四年が経過した心境について、朗読者が代読者である場合には作品に対する感想を尋ねた。

代読者は計七名である（それぞれ複数の作品を代読）。代読を依頼した理由は、次の通りである。

・転出等で六名の作者に協力の依頼ができなかった

・二名が自作の朗読を辞退

・一名が死去

・『生ぎるっちゃ』に収載されている八篇が作者不明。詩集では作者名の代わりに「あやめ」「すみれ」「ひまわり」など花の名前がつけられている。

三回の朗読のうち、録音状態の良いものを収録したが、甲乙つけがたい場合は、朗読に際して朗読者自身の評価が高かったものを収録した。なお、収録した作品のなかには文字の表記と発音に相違があるものが少なくない。こうした作品については、各作品の解説で説明する。

また、『生ぎるっちゃ』にはタイトルがない作品が多くある。今回は収録の便宜上、作品の冒頭をタイトルとして用いることにした。

1　おっきな笑顔の花

おっきな
おっきな
笑顔の花が
咲いだっちゃ

（朗読　伊藤　恵子）

▼東北方言では語中のタ行音が有声化してダ行音になるため、「咲いた」は「咲いだ」となる。「咲いだっちゃ」の終助詞の「ちゃ」は宮城県以外の地域でも使用されているが、宮城県のご当地ヒーローが「ダッチャー」と名付けられているように、宮城県を代表する方言として知られている。「ちゃ」については、2ページと3ページで説明したように共通語の「でしょう」や「よね」などにあたる働きを担っている。

2　笑ってみっか

いとう　けいこ

元気になる魔法
あったらいいべなぁ
見慣れた故郷の景色
他愛もない家族の会話
一番大切だったんだって
一番あったげがったって
失ぐして初めて気づいたんだ
ありがとう
みんなの笑顔ば思い出したら
つられで笑ってだ
心がぽうっと温っけぇ
元気になる魔法って
自分でかけるんだね

（朗読　伊藤　恵子）

▼「べ」は、推量・意志・確認・勧誘などを表すが、「いいべなぁ」は願望を表す。「温っけぇ」は「温かい」が連母音の融合（母音のアとイが連続すると母音がエになる）を起こしたもの。なお、朗読では「大切」ではなく「デージ（大事）」となっている。これは、作者が「大事」という表記を避けたためである。「笑顔ば」の「ば」は共通語の「を」にあたる。

3　負げねっちゃ

和田　多眞喜

負げねっちゃ
あしたを信じ
今日を生く

（朗読　中澤　和男）

▼「負けない」が語中のカ行音の有声化と連母音の融合で「負げね」となる。朗読では「あした」と「信じ」の「し」の発音が比較的明瞭に聞こえるが、中舌化によって「あすた」「すんじ」と発音する人もいる。

4　険しい道

高橋　あつ子

険しい道
ゆるぐねぇ道
いつか必ず道は開ける
一人でねぇがら

（朗読　高橋　あつ子）

▼「ゆるくない」が語中のカ行音の有声化と連母音の融合で「ゆるぐねぇ」になった。「容易ではない」という意味である。

5　焼がれい

雅　良

焼がれい
藁で編まって
ぶら下げらって
のごった一ぴぎ誰んのだ
そばでのっつぉ猫狙ってつぉ

（朗読　大友　富夫）

▼名取の閑上では、焼きがれいが名物であった。「のっつぉ猫」は、「野良猫」のこと。

6　しじみ貝

雅　良

寒も土用も
閑上のすづみけんこだった
体が知（す）ってるあの味は
いづんなったら食えっかな
イサバのおばちゃんなじょしてる

（朗読　大友　富夫）

▼中舌化で「しじみ」は「すづみ」、「知って」は「すって」となる。「なじょしてる」は「どうしてる」、「けんこ」は「貝」。

7　なじょすたの

松風　村雨

なじょすたの
未曾有の津波　乗り越えて
命絶つ友の
闇ぞ哀しき

（朗読　佐々木　靖子）

▼「なじょすたの」は「どうしたの」という疑問を表す表現である。「したの」が中舌化で「すたの」になった。震災の悲劇を詠んだ。

8　おらやんだ

高橋　学

おらやんだ
あいな津波は
もういらね

（朗読　高橋　学）

▼語中のダ行音が鼻音化するため、「やだ」は「やんだ」となる。「あいな」は「あのような」ということ。大津波を目撃したからこその偽らざる心情を吐露している。

9　津波よ

たんぽぽ

津波よ
なすてこの町
さらったの

（朗読　佐藤　きよ）

▼「なすて」は「なして」が中舌化したものである。「どうして」ということを意味する疑問の表現である。

10　思い出も

さくら

思い出も
さっぱどねぐなり
あっけらかん

（朗読　髙橋　幸子）

▼「さっぱど」は「さっぱりと」ということ。津波で何もかもが流された様子を詠んでいる。

11　おっかねぇ

大友　せつこ

おっかねぇ
怯え逃げたる
夢なりし
目覚めて後の
深くつかれる

（朗読　加藤　博子）

▼「おっかねぇ」は「おっかない」の「ない」が連母音の融合を起こしたもの。

12　おはよがす

星　まき

おはよがす
かげだ相手も
今はなし
おらほの町は
どごさいった

（朗読　星　まき）

▼「おはよがす」は「おはようございます」のこと。「おらほ」は「私の方」や「私たちの所」ということを意味する。「どごさ」の「さ」は方向を表す。

13　震災で

三浦　優子

震災で
いどご　はどごの
顔を見て
思いおこした
絆かな

（朗読　三浦　優子）

▼「いどご」「はどご」が語中語尾のカ行音・タ行音の有声化でガ行音・ダ行音になることで、「いどご」「はどご」となる。

14　忘ねっちゃ

高橋　茂信

忘ねっちゃ
ボランティアの
手を借りて
結んだ絆は
いつまでも

（朗読　高橋　茂信）

▼「忘れない」が連母音の融合で「忘れね」になり、「れ」のラ行の子音が抜け落ちて「わせね」となる。

15　あのねれぇ

小林　惣七

あのねれぇ
はじめて分かった
有りがたさ
苦難のあとの
思いやり

（朗読　小林　惣七）

▼「あのねれぇ」は、「あのね」のように話を始めるときに使う表現である。

16　しゃねぇ土地に移り住み

馬場　明美

しゃねぇ土地に移り住み
せごいかけながらの
お付き合い
空、風、匂い、古里恋し
必ず一緒にもどっから

（朗読　加藤　博子）

▼「しゃねぇ」は「知らない」ということ。「ら」のラ行の子音の脱落と連母音の融合によるもの。「せごいかける」は「励ます」という意味である。

17　あおい海

伊藤　育子

あおい海
みんなの宝さらったべ
底にかぐすて知らんぷり
毎日毎日　船出すて
網をかげでとっけすど
んだげんと
おらを育てだ恵みの海だ
仲良ぐ暮らすべあおい海

（朗読　金岡　律子）

▼「みんなの宝さらったべ」の「べ」は、共通語の「だろう」のように推量や確認を表すのに対して、最後の「仲良ぐ暮らすべ」の「べ」は、「暮らそう」という意味で意志や勧誘を表す。
「とっけす」は「取り返す」ということ。「んだげんと」は共通語の「けれども」にあたる逆接を意味する表現である。

18　ふるさとへ

伊藤　由美子

こっから離れだぐねぇ
ずっと昔から暮らすてだ
誰もうらまねぇ
誰もねたまねぇ
なぬもかも忘しぇねよに
見でおがねど
みんな戻ってくんの
待ってっから

（朗読　佐藤　きよ）

▼「こっから」は「ここから」ということ。「暮らすてだ」は「暮らしてた」の「し」の中舌化と語中のタ行音の有声化による。「なぬもかも」は「なにもかも」ということ。ナ行のイ段とウ段が近い音で発音されたものだが、朗読では比較的ナ行のイ段の音が明瞭に発音されている。

19　ねんどころ

森　わくり

ばんちゃんと寄ったがって寝た
ねんどごろ
ざっと昔に花が咲いた
ねんどごろ
ざっと昔がこんもり唄になった
ねんどごろ
津波さえこねど
ずうっとほどったべな
ねんどころ
今は仮設でただ独り
とぜんでほどんね
ねんどごろ

（朗読　佐藤　久子）

▼「ねんどごろ」は「寝所（ねどころ）」のこと。「ざっと昔」は「昔話」のこと。「とぜん」は「時間を持て余している」とか「淋しい」ということ。八行目の「ほどった」と最後から二行目の「ほどんね」の「ほどる」は「暖かくなる」という意味である。

20　友達と離れて

荒川　京子

友だちと離れて
なかなか会えないよ
ゆっくりお茶のみ
してみでぇなぁ

（朗読　金岡　律子）

▼「してみでぇ」は「してみたい」が連母音の融合を起こし、語中のタ行音の「て」が有声化でダ行音の「で」になった表現である。

21　なじょするや

すみれ

なじょするや
先の見えない
仮住まい

（朗読　中澤　和男）

▼「なじょする」は「どうする」という疑問を表す表現である。朗読では「見えない」の「見え」の部分が、やや連母音の融合を起こし、「めぇ」と発音されている。

22　ご先祖さん

星　まき

ご先祖さん
どごさ戻っか分かんねが
みんな一緒にもとの場所

（朗読　星　まき）

▼「どごさ」の助詞の「さ」は共通語の「に」や「へ」のように方向を表す。津波で先祖代々の墓が流されたことを詠んだ。

23　後がら

もも

後（うっしょ）がら
追っかげでくる津波見で
おっかねぇ　おっかねぇと
泣いったわらす
今は仮設で跳ねまわる

（朗読　加藤　博子）

▼「うっしょがら」は「後ろから」ということ。「わらす」は「幼児」を意味する。

24　さむい仮設

ひまわり

さむい仮設（いえ）
お茶っこ飲んで
ぬぐだまる

（朗読　髙橋　幸子）

▼東北方言では身近にあるものや愛情を感じさせるものに指小辞の「こ」を付ける。「お茶っこ」の「こ」も指小辞である。「ぬぐだまる」は「温まる」という意味である。

25　あずだすて

小林　とみえ

あずだすて
泣いては笑う
仮の宿
おてんと様も
笑ってござる

（朗読　小林　とみえ）

▼「あずだす」は「思い出す」ということ。「おてんと様」は「太陽」のこと。この詩の「仮の宿」とは、仮設のことである。

26　わらす子の笑う声

小林　とみえ

わらす子の
笑う声聞き
ホッとする
思わずおらも
顔ゆるむ

（朗読　小林　とみえ）

▼「わらす子」は「幼い子ども」のこと。震災の発生から少し時間が経過して子どもたちが明るさを取り戻した様子を詠んだ。

27　てたぱたと

小林　とみえ

てたぱたと
朝っぱらから支度して
リュックばしょって
浜の朝市

（朗読　小林　とみえ）

▼「てたぱたと」は忙しい様子を表す擬態語（オノマトペ）である。「リュックば」の「ば」は対象を表す共通語の「を」にあたる。「しょって」は「背負って」ということ。

28　みんながら

大友　忠志

みんながら
ほめでけらった
おらの趣味
仮設の表札
生ぎていげる

（朗読　大友　忠志）

▼「ほめでけらった」は「ほめてもらった」ということ。朗読では「生ぎて」の部分が口蓋化によって「いぢて」と発音されている。

なお、作者は名取市や岩沼市の仮設住宅や県内で生活することになったボランティアのために一四〇もの表札を作成したとのことである。

29　手芸

吾妻　美江子

おはよがす
今日は何を作んだべ
馴染の顔が集まって
ワイワイガヤガヤ
手作り教室
あやぁー
作る人に似て
めんこいごだぁ

（朗読　吾妻　美江子）

▼「おはよがす」は「おはようございます」のこと。「作んだべ」の「べ」は、共通語の「だろう」のように推量を意味する。「あやぁー」は、東北方言の感動詞で驚嘆や感嘆を表す。「めんこい」は「かわいい」ということ。「ごだぁ」は感動を表す終助詞の「こと」と助動詞の「だ」が融合したもの。

30　今はただ

星　まき

今はただ
命をもらい生き抜いて
我は誓うよ別れた友へ
笑顔で元気に暮らすっちゃ

（朗読　星　まき）

▼最後の「暮らすっちゃ」の終助詞の「ちゃ」は、震災後の生活を生き抜くための固い決意を表明している。

31　前向きに

荒川　よねこ

前向(めえ)きに
早い復興祈りつつ
今日も仮設で
ボランティア

（朗読　荒川よね子）

▼朗読では「前（まえ）」という発音で連母音の融合は生じない。詩の表現としては用いても、日常では連母音の融合による発音をしないためである。

32　いっぺえに

大友　せつこ

いっぺえに
もらった上着ガブガブで
とっけっこして着る
春の陽だまり

（朗読　加藤　博子）

▼「いっぱい」が連母音の融合を起こして「いっぺえ」となった。「とっけっこ」は「取り替えっこ」のこと。

33　春よ来い

れんげ

春よ来い
桜が咲いて
手んばだぎ

（朗読　白石　やす子）

▼「手んばだぎ」とは、左右の手のひらを打ち合せて鳴らすことである。

34　日和山

雅　良

復興の
テレビニュースさ
旧友（ともだず）達の顔
営農再開の日焼けの顔さ
エールを送る
昔、遠足で連（ち）でがった閑上日和山
賑やかな漁師の町（まず）んながさ
高くてでっけぐ見えだっけ
今は復興見守る鎮魂の
シンボルだな

（朗読　大友　富夫）

▼「旧友達」のルビの「ともだず」と「町」のルビの「まず」は中舌化による発音を反映したもの。「テレビニュースさ」「日焼けの顔さ」「町んながさ」の「さ」は共通語の「に」にあたる。「でっけぐ」は「大きく」という意味で、「でっかい」の「かい」が連母音の融合を起こしている。

35　復興に

高橋　学

復興に
気をもむ被災者
がんばっぺ

（朗読　高橋　学）

▼「べ」が「がんばる」に接続すると、「る」が促音便の「っ」となり、「べ」が「ぺ」になることがある。

36　塩田に

大友　せつこ

塩田に
水かけ流し今年こそ
がんばっぺやぁと
強くこぶし締め

（朗読　加藤　博子）

▼この詩の「塩田」とは、津波の被害を受けた田んぼのことである。

37　おっぴさん

小林　とみえ

おっぴさん
ちょぺっとづつでも歩きだし
負げでらんねど
腰さ万歩計

（朗読　小林　とみえ）

▼「おっぴさん」は「曾祖父母」のこと。「ちょぺっと」は「ちょびっと」のこと。腰に万歩計を付けて震災後に歩き出した高齢被災者の様子を詠んだ。

38　前さ進むど頑張っても

荒川　京子

前（めい）さ進むど頑張っても
時々涙が出るよ
さあ行ぐべ
家族みんなで新天地

（朗読　金岡　律子）

▼「前さ」は「前に」「前へ」ということ。「さあ行ぐべ」は共通語の「行こう」にあたり、「べ」は意志や勧誘を表す。

39　つまけでも

小林　惣七

つまけでも
また起き上がり
望み持ち
閖上街道
浜の心意気

（朗読　小林　惣七）

▼「つまけでも」は「つまづいても」ということ。津波で甚大な被害を受けた閖上は、漁場として活気に溢れた地域であった。

40　屋根は落ずる

山田　康子

屋根は落ずる
路（みち）はでこぼこ
んでも咲いだよ
故郷（さと）のはなもも

（朗読　山田　康子）

▼「落ちる」が中舌化して「落ずる」と発音される。「んでも」は「でも」の前に鼻音が入った発音を表している。

41　孫

伊藤　伊佐子

めごい孫
むがさるまで
がおってらんね
おぼこなすまで
達者でいるっちゃ

（朗読　佐藤　久子）

▼「めごい」は「かわいい」、「むがさる」は「嫁入りする」、「がおる」は「弱る」、「おぼこなす」は「出産する」という意味である。

42　なじょすっぺ

小林　惣七

なじょすっぺ
今は苦労のど真ん中
生きて行ぐっちゃ
復興見るまで

（朗読　小林　惣七）

▼「なじょすっぺ」は「なじょするべ」が変化した表現であり、「どうしよう」のように感動詞的に用いられる。

43　興す

くにお

さっぱどねぐなって
一年過ぎた
みんなと一緒に興す
興すべ新しい町を

（朗読　金岡國雄）

▼「さっぱど」は「さっぱりと」ということ。「興すべ」の「べ」は復興への意志だけでなく、その意志の確認や実行への誘いかけを表す。

44　震災前に戻すんでねぐ

高橋　茂信

震災前に戻すんでねぐ
安心と豊かさが
実感できる
街つぐっぺ

（朗読　高橋　茂信）

▼「つくる」が語中のカ行音の有声化で「つぐる」となり、意志・勧誘・確認を意味する「べ」が接続したことで促音化が生じ、「つぐっぺ」となった。

45　負げんなよ

あやめ

負げんなよ
頑張った分
良(い)ぐなるよ

（朗読　白石　やす子）

▼表記では語中のカ行音が有声化して「負げ」や「良ぐ」となる発音が表現されている。朗読では有声化が生じていない。

46　さぁやっぺ

小林　とみえ

さぁやっぺ
明日(あすた)を信じ　前(めえ)向いて
必ずくっから
幸せのゴール

（朗読　小林　とみえ）

▼「明日」のルビの「あすた」は中舌化、「前」のルビの「めえ」は連母音の融合を反映させた表記である。朗読では中舌化が生じていない。

47　幾重もの

松風　村雨

幾重もの
縁（えにし）に生へ導かれ
技を伝えん
九十翁は

（朗読　佐々木　靖子）

▼方言は使われていないが、長年にわたり習得した技術を若い世代に伝えていくことを生きるための拠り所にした高齢被災者の姿が詠まれている。

48　すり鉢ゴロゴロ

ぼたん

すり鉢ゴロゴロ
あんべいい
歯ごたえ、つゆ味最高だ
母ちゃんの思い出つまった
すり身汁

（朗読　伊藤　恵子）

▼「あんべいい」は「ちょうど良い」という意味である。「あんべ」は「あんばい」の「ばい」が連母音の融合を起こしたものである。

49　絆

本郷　紀子

「何（なぬ）もねぇ…」
荒野（あれの）の土地にたたずむと
海風吹いて声が聞こえる
「忘れねで…」
どごにいでも希望捨てずに
伝えてほしいこの海と町
「待ってろよ」
みんなの力借りっから
つなげよう手と手
広げよう輪を

（朗読　本郷　紀子）

▼名取の方言ではナ行のイ段とウ段が近い音で発音される傾向があり、「何」のルビが「なぬ」とあるのはそれを反映したものだが、朗読では「なんに」と発音されている。詩の中の「忘れねで…」は震災で亡くなった人の声であり、「待ってろよ」は震災を生きのびた人の声である。

50　生ぎる

高橋　善夫

写経で思い出蘇る
生がさって
生がさった

無常の世間　前向(めえ)いて
互いに支え
生ぎるっちゃ

（朗読　高橋　善夫）

▼「生がさって」は「生かされて」という受身の表現である。一方、「生がさった」は「生かさる」という可能を意味する方言の助動詞の「さる」を用いた表現である。「前」のルビの「めえ」は連母音の融合を反映した表記である。最後の「生ぎるっちゃ」の「ちゃ」が固い決意を表している。

51　明日　あさって　やなさって

多賀　多加子

写真見れば　もぞこくて
案(あじ)だすと　とぜんになる
いだますい人　ずいぶん逝った

津波が掃(はら)った　瓦礫の荒野(こうや)

白っ茶けた　おらほの町
ゆるぐねげんと　乗り越える
明日　あさって　やなさって
心　おっちょれそう…
歩けばつまけでばりで
はがいがねぇ
んだげんと　きっと乗り越える
明日　あさって　やなさって

（朗読　清水　みね）

▼「やなさって」は「明々後日」、「もぞこい」は「かわいそう」、「あじだす」は「思い出す」、「とぜん」は「淋しい」、「いだますい」は「惜しい」、「ゆるぐね」は「容易ではない」、「おっちょれそう」は「折れそう」、「つまけでばり」は「つまづいてばかり」、「はがいがねぇ」は「はかどらない」ということ。

52　旅立ち

本郷　真弓

何んもかもねぐなった跡さ
今、彼と立っています
ことばや国は違っても
正直なんだ　彼の目は
気持ちいいんだ　彼の心は
まるで　おらほの海みたい
逃げんでねぇがらね
幸せの旅立ちだから
大丈夫負げねぇがら
父さん母さん　二人の後姿
見で育ったんだもの

（朗読　本郷　紀子）

▼「何んもかもねぐなった跡さ」の「さ」は、方向ではなく存在の場所を表す。「おらほ」は「私の方」や「私たちの所」ということを意味する。

53　あんどん松より

森　わくり

閖上の海には日本一の赤貝がいる
ピタピタはだいだ
手のひらかまぼこ
閖上の匂いを焼き込んだ焼がれい
ビレンコは骨を丈夫にするがら
残さねで食べてけさいね
今夜　明日のばんげ、
あさってのばんげ
まるで　おらほの海みたい
ほどほどに飲むと
長生きのもとになる
地酒　浪の音
大椀もっきりひっかげで
横てんばだぎ
赤貝の大漁祝いをする日まで
負げねっちゃで頑張ってけさいん
おれもまだまだ元気でいるがら

（朗読　佐藤　久子）

▼東日本大震災を乗り越えて現存する「あんどん松」は名取川の河口の堤防沿いの並木である。伊達政宗が遠州から取り寄せて植樹したと伝えられている。

「食べてけさい」は「食べてください」ということ。「けさい」は依頼を意味する方言である。「ばんげ」は「夕方」、「おらほ」は「私の方」や「私たちの所」、「もっきり」は「コップ酒」、「手んばたぎ」は「左右の手を打ち合せて鳴らすこと」を意味する。「がんばってけさいん」の「けさいん」は丁寧な依頼を表す。

54 みんな寄れや

森　わくり

みんな寄れ
二年ぶりのお花見だ
さくらと一緒に笑うべや
もっきりひっかげ
みんなで唄う大漁節

（朗読　加藤　博子）

▼「笑うべや」の「べ」は、「一緒に」という表現を伴って使われており、ここでは勧誘を表す。

55 水仙

森　わくり

どごさよっこよりすんでなぐ
来てしまった屋敷あど
おがちゃん育でだ　水仙一株
すまぶりすて咲いだ
おがちゃんみでな　めんこい花

（朗読　本郷　紀子）

▼「よっこより」は「寄り道」のこと。「すまぶり」は「その場に最後まで残ること」、「めんこい」は「かわいい」という意味である。

56 手

今野　紀美子

肩に受ぐ
掌（て）のぬぐもりが
戸を開げだ
心の扉
明日（あした）に
生ぎるっちゃ

（朗読　今野　紀美子）

▼絶望から救われた心境を詠んだ。

57　みんなの願いの花びら

みんなの願いの花びらを
いっぺつけで
りっぱに咲いでけろな

（朗読　伊藤　恵子）

▼「いっぺ」は「いっぱい」の「ぱい」が連母音の融合を起こしたもの。「咲いでけろな」の「けろ」は相手に自分の願望を伝える表現である。

『生ぎるっちゃ』は、「おっきな笑顔の花」から始まり、「みんなの願いの花びら」で終わることからも明らかなように、被災者の姿や思いを花に見立てている。二〇一三年に発表された原本の表紙に名取市役所の満開の桜の写真が使われたことも、「方言を語り残そう会」が詩集『生ぎるっちゃ』の作成に込めた願いをよく表している。

『生ぎるっちゃ』の原本（2013 年）

文化庁委託事業報告書
被災地方言の保存・継承のための
方言の記録と公開

2018 年（平成 30 年）3 月 21 日　印刷
2018 年（平成 30 年）3 月 27 日　発行

編者　東北大学方言研究センター
発行所　東北大学大学院文学研究科国語学研究室
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1　TEL 022(795)5987